

音楽の世界

目次

メッセージ	今こそ尊敬と協力を . . .	助川 敏弥	2
論壇	フレッシュコンサートを前にして	中島 洋一	4
特集	Fresh Concert -CMDJ2011-の出演者に訊く!		
	(監修: 栗栖麻衣子 / 中島洋一)		6
長期連載			
	音・雑記一ひなの里通信一 (37)	狭間 壮	14
	名曲喫茶の片隅から (18)	宮本 英世	16
	音盤奇譚 (23)	板倉 重雄	18
	難儀な人 <指揮者 宇宿允人氏追悼>	浅岡 弘和	20
コンサートレポート			
	「COMPOSITIONS 2011」をきいて	助川 敏弥	22
	廣瀬史佳 & アダルベルト・スコチッチ デュオリサイタル	高島 和義	24
CD レビュー	菊地雅春の音楽 自選集 Vol.1	高島 和義	25
短期連載			
	明日の歌を 第三回 上野雄次氏に訊く (1)	橘川 琢	26
	現代音楽見聞記(2)	西 耕一	31
	日本音楽舞踊会議: 出版楽譜のご案内	高橋 雅光	32
◆コンサート・プログラム◆			
	Fresh Concert CMDJ2011		36
	読者のページ~東北関東大震災について思う~		48
	CMDJ 会と会員の情報		51
			1

謹んで災害のお見舞いを申し上げます。

このたびの東北関東大震災の被害に遭われた皆様に、心よりお見舞い申し上げます。
会員一同、一日も早い復興をお祈り申し上げます。

日本音楽舞踊会議
月刊「音楽の世界」

いまこそ尊敬と協力を

代表理事 作曲 助川敏弥

2011年3月11日14時46分、その時私は相模原の仕事場にいた。六階だから揺れが大きい。大型スピーカー二基が相次いで大音響とともに台座から転落、続いて台上の複数の楽器類が、楽譜書物類が、CDが次々と落下散乱、室内は惨憺たる有様となった。この国では地震は珍しくない。私の仕事場もしばしばゆれる。六階はつねに揺れが増幅されるが、しかし、揺れはしばらくすると収まるのがこれまでだった。収まったあとで、いまのは少し大きかったと思うことはある。新潟地震の時もそうだった。しかし、こんどは収まらない。そろそろ終りかと思う時いよいよひどくなった。電車は止まり帰宅出来ず。毛布を持ち出し泊まり込みとなった。関東大震災を上回る巨大地震であることが少しずつ分ってきた。

世の中には人の力を超えるものがある。

こういう時、人は、いらだちから、何かに向けて、不安、不信、憤懣、怒り、をぶつきたくなる。しかし、人の力を超えたものに対して策は存在しない。人がこの世では限りある存在であることから由来するのであるから。森林火災の時、ライオンも羊も並んで逃げるそうではないか。日頃の争いを続行している場合ではない。

公私官公それぞれの位置に対して、不満、憤懣、怒り — と当人が主観しているものをぶつけたくなるだろうが、いまは人が争っている時ではない。被災者はもちろん、政府にも東京電力にも応援と協力と声援を送ろう。

風評、デマの類いが最も有害である。原子力事故についても諸外国に対しても正確な情報を伝えよう。外国が過大に誤報し、それがひろがり、また逆輸入されて無用な不安を起す。愚かなことである。しかしこれも時間とともに修正されるだろう。すべてに時間がかかり時間が解決する。いまこれを書いている時点でも、原子炉の冷却のために命がけの作業をしている人たちがいる。この人たちに無限の感謝と尊敬を贈ろう。

会社の業務の停滞、通勤の不調と苦痛を怒りとともに激白する人もいる。それも自然な感情であるが、誰が地震を引き起こしたわけでもない。災害対策には想定というものが前提となるが、しかし、人がどれだけ想定しても自然はそれを超える。原子炉の津波対策を警告していたとある政党が公言している。しかし、これまでの想定は5メートル程度だった。こんどの津波は14メートルを超えていたそうだ。こんな津波まで予測していたのだろうか。誰も経験したことがないことが起こったのだ。TVで司会者が原子炉事故について不安をあおるような言動をするのに対して、温顔の専門家が、一語ずつ、穏やかに、明解に、親切に、完璧に否定しているのを見た。実に嬉しかった。こういう人こそいま必要である。信号が消えた暗黒の交差点で、人と車が静かに譲り合いながら通行していた。人間はなかなかりっぱなものであると感動した。

いま私たちが知ることは、人が自然の前ではいかに小さいものかということである。自然、を、世界、といってもいい、宇宙、といってもいい。私たちは自分たちの知恵で世界のほとんどを知ったつもりになっていたかもしれない。ついでに私たちの仕事、音楽にまでいたれば、人の心も宇宙と同じである。「海よりも空よりも壮大なもの、それは人の心だ」とヴィクトル・ユゴーは言った。私たち仕事人は、人の心という無限の宇宙に語りかけることである。

2011. 3. 22. (すけがわ・としゃ)

作曲 中島 洋一

今年で第9回目を迎える「Fresh Concert CMDJ」も、目前に迫ってまいりました。いままでに、このコンサートの舞台を踏んだ若い音楽家たちは、優に100人を越えております。昨年の桜の開花は早かったものの、演奏会当日まで桜が残っていましたが、今年もそれを期待することが出来るかもしれません。

しかし、今年は桜の花を愛でる余裕がなかなか持てないほどの、大災害に襲われました。今回の東北関東大震災を経験して、私は人間の限界というものを改めて強く感じました。人は経験をしたことに対しては、それなりの対応力を発揮出来るのですが、未経験なこと、想像を超えた事態に対しては、殆ど対応出来ないということです。また、被災直後の数日は、被災地では電気が通らず、水道、ガスは使えず、携帯電話も役に立たず、車も殆ど使えなかったようです。電気と通信、ガソリンに依存していた我々現代人の生活が、津波によって、砂上の楼閣のように脆くも崩れ去ったのです。

しかし、その一方で、人間の逞しさと素晴らしさを改めて知りました。陸前高田市の避難所では、中学生たちが協力して「ガンバロー高田 命あることを喜ぼう」という横断幕をつくり、大人の被災者たちを勇気づけておりました。協力した子供たちの中には、自分の家族の安否も確認出来ていない者もいたというのに。

大震災後、しばらくは、コンサート実行委員として「Fresh Concert」を開催すべきかどうか迷いましたが、こういう時だからこそ後に退いてはならないと考え、予定通り実行することを決断しました。

被災された方々がこのコンサートを聴きにいらっしゃることは、まずないでしょう。しかし、出演者の皆様には、音楽を通して人々に何かを与えようと力み過ぎるのではなく、その前に、自分が生きていて、音楽をすることが出来る喜びを、じっくりと噛みしめて欲しいのです。

「こういう時だからこそ、自分の本分である音楽に専念すべき」という考え方もあるでしょうが、人の心は岩のように不動のものではありません。東北出身の日本ハムの大エース、ダルビッシュ有投手は、「野球に専念すべきなのだが、なかなかそういう気持ちになれない」と本音を語っていましたし、同じく東北高校出身のプロゴルファーの有村智恵選手は、被災された方々の事を語るとき、涙ぐんで言葉を

詰まらせていました。そういうアスリートたちの姿を見て、正直な人達だと思いました。そのように揺れ動く心をもつのが人間であり、だからこそ他人の痛みを分かち合うことが出来るのです。

しかし、いま我々が音楽を通して被災者の方々のために何かをやろうとしても、出来ることは微々たるものでしょう。私の甥はボランティアとして東北地方に行っ
て活動しているようですが、私には暇も体力もなく、ボランティア活動は難しいで
しょう。私ができることと云ったら、せいぜい節電に少し気を使うこととか、時々
義援金箱に小銭を投函することくらいです。

フレッシュコンサートに出演する若い人たちも、東京周辺で音楽活動をしている
限り、直接被災者のために役立つようなことは、なかなか出来ないと思います。で
も、それはしょうがないことかもしれません。自分のことや身の回りのことで、や
らなくてはならないことが沢山あるでしょうし、音楽活動を続けて行くこと自体、
大きな困難をとまなうことですから。しかし、人の悲しみや苦しみを感じとれる精
細な感性と他人を思いやる想像力を失わずに生活し、活動を続けて行って欲しいと
願っています。

今回の大震災に際して、日本人だけではなく、世界中の国々の多くの方々から支
援や励ましの言葉をいただきました。多くの外国の方々のメッセージに表現されて
いるように、私も、我が国は必ず復興すると信じています。私は被災者の方々の手
助けになるようなことは、殆ど何も出来ませんでした。逆に被災者の方々の行動
や発言から人間の素晴らしさを教えてもらい、そして勇気をもらいました。

今度の震災を通して、「人は未来を知ることができない。」ということを感じ
ました。しかし、人は未来を知ることが出来なくとも、未来を切り開くことは出来
ます。また、新しい経験を、未来を切り開く糧とすることが出来ます。

フレッシュコンサートの出演者の皆様は、心をこめて精一杯演奏してください。
そして、社会の未来、音楽文化の未来を切り開く力となってください。

お客の皆様とともに希望を持って、前に進んで行こうじゃありませんか。

(なかじま・よういち 本誌編集長&フレッシュコンサート実行委員長)

特集 Fresh Concert -CMDJ2011-の出演者に訊く！

Fresh Concert も今年で9回目を迎えます。第1回～第4回までは出演者を集め、座談会を開催し、その内容をコンサート特集記事として掲載してまいりましたが、5回目からは幾つかの質問項目を用意し、その回答をこの雑誌に掲載するようにしています。しかし、アンケートの回答をお願いしている間に、東北関東大震災が襲いました。その前に回答を寄せた人と、大震災の後に回答を寄せた人がおりましたが、大震災後に回答を寄せた人の多くが、大震災のことに触れておりました。内容的には大震災の被災者の被災者の皆様への励ましの言葉も多くありましたが、大震災後の計画停電などによって、卒業演奏や、卒業式が中止になった音楽大学もあり、人ごととは思えないと思った人が多かったからだと思いますが、自分自身を鼓舞するような言葉もありました。また、韓国からの留学生、申恩珠さんと、鄭胤先さんについては、日本語のアンケートに回答することは色々難しい点もあるので、メッセージのみをお願いしましたが、二人とも大震災のことに触れております。

二人のメッセージは、我々日本人を勇気づけてくれると思います。

ところで、アンケートの質問項目については、昨年を引き続いて、もう一人のコンサート実行委員である栗栖麻衣子さんと私で意見を出し合い、質問事項を決めました。

音楽現代

2011年4月号 定価840円

♪特集＝作曲家ベイシック・シリーズ7

「モーツァルトの交響曲」

♪特別企画

- ヤナーチェク狂恋～ヤナーチェクの人間性と作品
- ラ・フォル・ジュルネ・オ・ジャポン（熱狂の日）
音楽祭 2011

「後期ロマン派のタイタン（巨人たち）」〈特別インタビュー：ルネ・マルタン〉

♪カラー口絵

- ・マリンスキーオペラ「影のない女」、「トゥーランドット」
- ・トナカイサロンオペラ「メリー・ウィドウ」

♪インタビュー

田中信昭 渡邊康雄 ポール・ルイス
ピエタリ・インキネン

♪特別記事

「今、オーケストラに何を求めるのか？」

西村朗＋片山杜秀＋江川紹子＋下野竜也＋横田弘幸
読売日本交響楽団第500回記念定期演奏会アフター
トークより

〒111-0054 東京都台東区鳥越 2-11-11

TOMYビル 3F

芸術現代社 TEL3861-2159

1. 今回のコンサートへの抱負、演奏する曲に対する思いなどを込めたメッセージをお願いします。
2. 音楽の道に進んだきっかけは？
3. 「音楽のもつ力」は、どんなところにあると思いますか。（よろしければ貴方のご経験等まじえてお書きください）？
4. 取り組んでみたい企画、研究テーマ、挑戦してみたいプログラム、作曲家、作品は？
5. 生きていて辛いときに、何を考え、何をしますか？
6. 「toi, toi, toi」のように、本番前にきまってしまう、ジnkスのようなことがありますか？
7. 好きな食べ物は？
8. その他（書きたいことをなんでも書いて下さい。書かなくともいいです）

今年質問項目は、1.～4.までは、昨年とほぼ同じですが、5.は随分違っております。また、重い5.の質問の後に、軽いめの7.の質問が続くのでは落差が大きすぎるということで、質問6.を加え、項目を一つ増やしました。

1.のメッセージは皆さんが一番力を入れて書いておりましたが、回答のうち、特に興味深かったのは、3.と、5.の生きていて辛いときに、何を考え、何をしますか？の質問に対する回答でした。5.の質問は内容が重く、答えにくいかと考えておりましたが、出演者の皆さんは、素直に答えてくれたように思いました。しかし、回答は様々で、「今が一番辛いときと自分に言い聞かせ、前を向き希望を持って頑張るように努めます。」という回答もあれば、「果たしてそれは本当に辛いと言えることなのか、もう一度考えてみます。」という一見正反対に見える回答がありました。

それでは、出演者のみなさんの回答を、演奏順に紹介させていただきます。

なお、ページ数節約のため、質問事項の重複掲載は避け、回答のみを掲載させていただきました。また、出演者の写真につきましてはプログラムのページに掲載しておりますので、そちらを併せてご覧頂きたいと存じます。

(栗栖麻衣子／中島洋一〈文責〉)

① 北風 紘子 (ソプラノ)

1. 今まで、そしてこれからも支えてくださる先生、家族、友達、関わる全ての方々に感謝の気持ちを込めまして、今回のフレッシュコンサートに臨ませていただきます。
2. 市民オペラの合唱に参加し、声をもって表現することの楽しさを知り、歌を学びたいと思うようになったのがきっかけです。
3. 言葉だけでは伝えきれない気持ちを伝えたり、人の心を癒すパワーを持っていると思います。

4. 今までフォーレの歌曲を中心として勉強してきましたが、他の作曲家の作品にも触れていきたいと思っています。
5. 家族のことを考えたり、人と話したり、音楽を聴いたりしています。
6. ジンクス等はありませんが、深呼吸をして、自分を落ち着かせています。
7. 果物、シチュー、グリル料理

② 高橋 健介 (ピアノ)

1. シャコンヌは昔から憧れていた曲です。それから昨年、北川先生のリサイタルでこの曲を聴いて非常に深い感銘を受けたこと、この演奏会の機会を頂いたことの3つが重なり、遂にシャコンヌを勉強できる時が来たという気がしています。

本日演奏できることに感謝致します。

2. 小学校の音楽の先生の影響です。
3. 先月の(ニュージーランドの)地震で改めて考えさせられましたが、未だ考え中です。
4. オペラ、倍音、純正律、バーンスタイン、宗教曲、録音研究、等。
5. 解決を導いてくれそうな本を読みます。
6. 本番前を大切にしよう意識しています。
7. 何でも好きです。

③ 今井 梨紗子 (ソプラノ)

1. 今回フレッシュコンサートに出演させて頂けること、大変嬉しく思います。また貴重な機会を与えて下さり、心より感謝申し上げます。

『エジプトのジュリオ・チェーザレ』よりクレオパトラのアリアを歌わせて頂きます。愛するチェーザレが戦いに向かって行ってしまい、残されたクレオパトラはチェーザレを案じて天に祈ります。切ない想いを表現できればと思います。

2. 幼い頃から音楽が好きで、歌うことが好きだったからです。
3. 心を満たすことができる魔法だと思います。
4. シューマン、シューベルト、ヘンデルの作品に取り組んでいきたいです。
5. 今が一番辛いときと自分に言い聞かせ、前を向き希望を持って頑張るように努めます。
6. 特にありません。
7. スイーツ

④ 申 恩珠 (ピアノ)

《メッセージ》

私は音楽というのはただ作曲家の思想を演奏家が聴衆に一方的に伝えることではなく、演奏家と聴衆が一緒に作って行くことだと思っております。演奏する人や聞いている人が音楽を通して、自分が世界から外れた存在ではなく、宇宙の一部として一緒に生きていく存在だということを感じるのではないかと、私自身でもまだよく分かりませんが、そういう音楽をやりたいという気持ちだけでいつも頑張っております。私の演奏を通して何が表現できるのか、何が聞いている方々の心まで伝えられるのか、それを判断するのは私ではないと思いますが、もし出来る事なら、今回の震災のため悲しさに沈んでいる方々についての応援の気持ちを、少しでもお伝えできれば嬉しいと思っております。

⑤ 鎌田 亮子 (ソプラノ)

1. この度はフレッシュコンサートに出演させていただける機会を与えて下さり、心より感謝を申し上げます。このような素敵な演奏会で演奏させていただけることを大変嬉しく思っております。

いつもあたたかく愛情いっぱいにご指導下さり、見守って下さる秋山理恵先生をはじめ、実行委員の皆様、会場まで足を運んで下さる皆様、お力添えを下さるすべての皆様に感謝の気持ちを込めて歌わせていただきたいと思いますと思っております。

2. 両親の影響だと思えます。物心がついた頃には音楽に触れておりました。今では音楽を幼い頃に身近なものにしてくれていた両親にとっても感謝しています。

3. 音楽は万国共通で、例えば言葉が分からなくても何かを通じ合うことができる、一緒に楽しむことができる、そのようなコミュニケーションの力を多大に持っていると思えます。

4. 幅広く様々な作曲家の作品に触れてみたいと思っておりますが、今回歌わせていただくベルリオーズは初めて勉強させていただいてからとても大好きな作曲家になり、今後ベルリオーズの他の歌曲にも触れてみたいと思っております。

5. 辛いこととハッピーなことはその度合いは様々でも交互にやってくると信じているので、辛い時には次に来るであろうハッピーなことを考えて過ごします。単純なので意外と乗り切れたりします(笑)。

6. 伴奏者に腰を思いっきり叩いてもらいます。長年伴奏をしてくれている方なので容赦なく叩いてくれます(笑)。

7. パスタが好きです。その他は食材になってしまいますが、紫蘇、パセリ、しょうが、セロリなど香りのするものが全般的に大好きです。

⑥ 加藤 千理 (Fl.) / 椎野 未花 (Ob.) / 誉田 未季 (Cl.) / 小林 香緒理 (Fag.)
齋藤 嵩之 (Horn) / 草間 葉月 (Pf) 《六重奏》

1. 音楽に対して熱い思いを持つ仲間と、このような貴重なステージで共演できることを大変有り難く、幸せに思います。6つの楽器が織り成すアンサンブルをお楽しみ頂ければと思います。(加藤)

今日本が深刻な状況の中で、自分たちが演奏できる機会を頂けたことに感謝し、お客様に楽しんで頂けるような演奏をしたいです。(齊藤)

私たちは卒業式が中止になってしまったので、大学生活を思い出しながら演奏したいです。(誉田)

今回の演奏会は、私にとって大学卒業後初の演奏会です。何事も初めが肝心とは言いますが、この演奏会は将来に向けての大事な第一歩であると考えております。

また曲も私自身大好きなプーランクの6重奏。オーボエには美しくも哀愁漂う旋律が書かれています。色鮮やかなプーランクの世界を情感たっぷりに歌い込めればと思います。(椎野)

東日本大震災で被災された方々が一刻も早く元気になるように、宮城県民として私に今出来ることをやりたいです。(小林)

2. 気が付いたら色々な楽器に手を付けていました。決定的なきっかけは恩師との出会いです。(加藤)

中学での吹奏楽部入部をきっかけにオーボエに出会い、その魅力にとりつかれて。もともと目立つ事が好きで、『もっとソロが吹きたい』『上手になりたい』という思いでいたらいつの間にかこんな所まで来てしまいました。(椎野)

楽しくて続けていたら何故かこの道に進んでいました。(小林)

両親が音楽好きなのもあり、常に音楽が身近であったため今の自分があるのだと思います。(斎藤)

“音楽をしている自分”がとても自然だと感じた事。(草間)

3. 音楽には人を楽しい気分させたり時には切ない気持ちにさせたり、人間の感情を揺さぶる力があると思います。(加藤)

言葉では表現できない部分を表現できたり、心の隙間を埋めたり、癒しだと思います。親が声楽なのですが、昔、寝たきりで意識のない祖母にずっとイヤホンをつけて自分の演奏を聴かせていました。言葉なくとも思いを伝えられる手段だと思います。(誉田)

音楽は形もなく言葉もないのに、人の感情を動かす力があると思います。演奏側の気持ち次第では言葉よりも伝わる力が強い、そんなところだと思います。(椎野)

みんなと音楽を共有できた時の素晴らしさ(小林)

全く違う文化や価値観を持つ人とも同じ感情や意志を共有できるところが音楽の素晴らしいところだと思います。ヨーロッパやアジアの人達と音楽で意志を共有できた時は音楽をやっている良かったと思えました。(斎藤)

4. アロマセラピーと音楽のコラボレーション。多くの人に癒しを提供できたらと思い、このような企画を考えています。(加藤)

いつかオーケストラをバックにコンチェルトをやってみたいです。(誉田)

人の心に染み渡るような美しい音色を研究していきたいです。私にしか出せない音、『これが私の音楽』という確固たるものを見つけていきたいです。(椎野)

5. 自分が楽しい、幸せだと思ふ道に身を置き、何通りもの可能性を見出だす。(加藤)

人と会います。何も考えず、好きなことをします。(誉田)

あまり考えすぎず、自分で楽しい事を見つけて気分転換すれば、そのうち辛さもなくなります。(椎野)

この辛い気持ちも音楽をやる上で役にたつかもかもしれないと考える。それと音楽をきく、人と話す、寝る(小林)

いつも通り過ごすことを心掛ける(斎藤)

今自分に試練が与えられていることを、“ありがたい”と思う。(草間)

6. 最近ではラベンダーの香りで心身をリラックスさせます。(加藤)

私はリポビタンを飲んで軽くストレッチをします。(誉田)

特にありませんが、本番前の食事には気をつけるようにしています。(椎野)

そのジンクスを忘れたら失敗しそうなのでないです。(小林)

その本番を楽しむことだけを考えます。(斎藤)

本番の日はずっと同じハンカチを持っています。(草間)

7. ラーメン！(加藤)／抹茶のスイーツ(誉田)／チョコレートです！(椎野)

甘いもの(小林)／チーズ(斎藤)／おにぎり、甘いもの(草間)

8. まだ混乱が続く中、会場に足を運んで下さった皆様に感謝の気持ちを込めて演奏致します。(斎藤)

⑦ 坂本 久美 (ソプラノ)

1. この度の東北地方太平洋沖地震により、被災された皆様に心よりお見舞い申し上げます。寒さと不自由な生活の中で過ごしている方や、原発の不安をかかえ避難してらっしゃる方々…被災地の皆様がどのような思いで毎日を過ごされているかを考えますと、一日も早い復旧を願うばかりです。本日は、まだまだ音楽家として未熟ではありますが、音楽を通じて少しでも今日いらして下さった皆様のお心を支えることができればと思っております。そしてこの様な中でも、いつも心から支えて下さる秋山先生、家族や友人に感謝をこめて歌いたいと思います。

2. 先にピアノを習い始めた姉がピアノを弾く姿が羨ましくて、それをまねして、今では信じられないような時間ピアノを弾いていたそうです。それがきっかけでピアノを習い始

めたことが音楽の道に進む始まりだったと思います。

3. 聴き手としては本当に素晴らしい演奏を聞いたときに、自分のし得ない経験や感情を体感させてくれたり、自分の記憶や感情を呼び起こして共感させてくれるところ。演奏者としては作曲家が何を思って何を考えたのか、思いを馳せて時には何百何千年も前の作曲家や詩人と共感することができるところ。

4. ドビュッシーの後期の歌曲作品についての研究。《フランソワ・ヴィヨンの3つのバラード》を演奏してみたいです。

5. 幸せなことに自分自身のことで生きていて辛いほどの経験をしたことはありませんが、もしそのような時が来たら状況をよく見て、静かに自分の心に目を向けて少しずつでも受け入れることをしたいと思います。

6. 特にありませんが、本番前にじっとしているのが嫌いなので、周りの人と喋ったり歩き回ったりしていることが多いです。

7. チーズ。チーズそのものも、チーズ味の加工品も好きです。

⑧ 北村 真紀子（ピアノ）

1. 私は昨年から右手をジストニアという筋が収縮していく病気にかかり、両手でピアノを弾く事が困難になりました。

本日演奏させて頂く《左手のためのシャコンヌ》は、シューマンの妻でありピアニストでもあるクララが右手を病気で壊した際に、友人であるブラームスが、バッハ作曲無伴奏ヴァイオリンのためのパルティータの中の終曲、シャコンヌを片腕でも弾けるピアノ曲に編曲して捧げた曲です。

クララがブラームスの助けに支えられピアニストとして復活を遂げた様に、私も本当に周りの方々に支えられて、左手だけでも演奏ができる環境を作って頂きました。感謝の気持ちを含めて、演奏したいと思います。

2. 幼稚園の時に、たまたま友人に誘ってもらいヤマハに通ったのが始まりです。

3. 正直に言うと、まだ自分でもわからなくて模索中です。いつか音楽の力を理解できる境地に達してみたいです。

4. ブラジル音楽に興味があります。今私は院生なのですが、卒業論文にはブラジルの作曲家ヴィラ・ロボスについて調べてみたいと思います。

5. まずピアノを弾かないと思います(笑)

動物が大好きなので、うちで飼っている犬と1日中一緒にいると思います。つまり、それくらい今までの私の人生は呑気で、さほど生きていて辛い程苦しい事はなかったという事なのだと思います。

6. ジンクスは特に作っていません。どんな状況、状態でも自分を表現できる様な人間

になりたいです。

7. 味の濃いラーメンが好きです。ただ、ラーメン屋でにんにくたっぷりのラーメンを食べると決まってお腹を壊すので複雑です…(笑)

⑨ 大武 彩子 (ソプラノ)

1. この度は、このような素敵なコンサートに出演させていただけますこと、とても嬉しく思います。今回演奏させていただくのは、歌劇《ホフマン物語》のなかから、オランピアという自動人形の歌うアリアです。

果たして彼女は人間なのか人形なのか――、主人公ホフマンをはじめとして登場人物たちを楽しませ、そして惑わせる、可憐でユーモアに満ちたこのアリアを、どうぞお楽しみください！

2. 高校生の時、学内の活動でクワイヤー（聖歌隊）に所属したことと、ピアノを師事していた先生から、歌の道を薦めていただいたこと。

3. 国境、時代などを超えて、瞬時に人の心に訴えかけ、さまざまな感情を喚起させるところが、音楽の魅力であり力であると思っています。私自身も、さまざまな気持ちを音楽からもらっており、それは私にとってかけがえのないものです。

4. いろいろな音楽に触れてゆきたいですが、とりわけ学びたいジャンルは、フランス・オペラ、宗教曲全般。作曲家では、ドイツ系ですが、モーツァルト、バッハ、R. シュトラウスの作品に惹かれます。

5. 果たしてそれは本当に辛いと言えることなのか、もう一度考えてみます。

それでも辛いと感じてしまったら、どうにかして視点を変えられるようになるまで待ちます。

6. ジンクス、というわけではありませんが、直前に体のどこかを動かしてきたいので、舞台裏などで簡単なストレッチをすることが多いです。

7. ぶどう

⑩ 鄭 胤先 (ピアノ)

《メッセージ》

大震災に遭われた日本の皆様方に、心からお見舞い申し上げます。
神様に日本のこと、早く良くなるようにいつも祈っております。

私がピアノの演奏で表現したいのは、ピアノという楽器が大好きな気持ちと、音楽についての私の熱情と愛だと思っております。

音楽家にこそできること

—東北・関東大震災に—

天罰！とは、よくも言ったものだ。この度の東北・関東大震災に際しての石原東京都知事のコメント。床屋政談ではない、記者会見でのものだ。これがいかに心ない傲慢な言葉であるかに紙幅を費す必要もない。さすがに翌日「撤回し、深くおわびします」と陳謝した。

この陳謝、今までの彼の暴言の数々を思いおこせば、心からのものとは思えないのだ。この「天罰」の暴言も、本音であろう。忘れないように書きとめておこうと思う。かりそめにも都民が、その命と暮らしを委ねたリーダーの言葉として。＜津波を利用して我欲を洗い落とす必要がある。日本人の垢をね。やっぱり天罰だと思う。—2011・3・16 信濃毎日新聞—＞

地震、津波、原発のトラブルと続く恐怖の連鎖には、言葉を失う。そして思う。自分は何か力になれるだろうか、と。そして更に思うのだ。頼り甲斐の無い己の情けなさを。只今もなお6日もたって、安否確認のできぬ状況と刻々伝わる惨状を見聞きするにつれ、他人事ならず胸塞ぐ思いで鬱々としている。

東北地方太平洋沖で地震発生 of それぞれのその時、私は午前中の仕事を終えて帰宅、昼食後ゆっくりと雑誌を広げていた。

と、蛍光灯のスイッチのヒモが揺れる。さては、目まいかといぶかしく思う間もなくゆらゆらと家がゆすられた。地震！

揺れがいつもとは違う、長い。猫を連れてどこに逃げるか。家人は留守。築36年耐

震不合格の吾が家、これは・・・と覚悟した時、揺れが止った。

さて、家人である。諏訪のお寺で、鍵盤ハーモニカのコンサートの最中であつた。広いお堂。ご本尊像を背に、天井から吊られる華麗で厳かな飾りの天蓋の下での演奏である。

突然の揺れ。地震だと分かっても演奏は止められない。天蓋の飾り金具が頭上で揺れ、すれあい、かすかに音をたてはじめる。逃げて！のお客さんの声に、その場を離れた。

揺れがおさまって、残りのプログラムを2曲演奏してコンサートを終えたのだという。自分が先に逃げだすわけにはいかないと思つたらしい。死んでもラッパを離さなかった「木口小平」の気分だったか？「ナムマンダブ、ナムマンダブ」を唱えながらの、エルガーの「愛の挨拶」。

震源地とは比ぶべくもないが、それでも諏訪地方、震度4。コンサートに参加者の誰もが、その後、被災地の惨たんに驚天することになるのだ。

地震と津波の破壊に打ちのめされた被災地の悲しみは、察するに余りある。これからの復興には、なみなみならぬエネルギーを要する。長い時間もかかる。神戸、新潟で私たちは、それを経験した。

復興の支援にと逸る心をおさえながら、考える。直には役にたたずとも、必ず役にたてる日がくる、と。それは、小さくも私

の経験によるものであるが。

16年前の今頃、神戸は復興を急いでいた。日本中からの援助を支えにして。私はそれを傍観するのみ。そこに電話があった。神戸の子どもたちにコンサートを、というのだ。それは、「心の一曲を語り、歌おう」の私と仲間の活動「赤とんぼ・私の心の一曲」が縁を結んでのことである。

神戸市長田区、真陽（しんよう）小学校の体育館。子どもたちと、近隣の市民で一杯になっていた。子どもたちの手づくりの看板には歓迎の言葉が踊っていた。「ようこそ！松本からの赤とんぼ！」約束から半年、季節は秋になっていたのである。

その時のショックで、オネショをしたり、情緒不安定になった子どもたちもあり、町の復興だけでなく、心も、まだまだです。とは校長先生から聞いた話だ。

子どもたちからの歓声。握手にとかけよる手をにぎり、命をとりとめた子どもたちの喜びを、熱く受けとめたのだった。

子どもたちの心の回復に必要なものは、インフラだけではない。音楽も求められるものの一つであった。その時、知らされたことである。

音楽（演奏）家にできること、それは、只今に間に合うことではないかもしれないが、これからいくらでもある。被災者のつらさは、無我夢中が一段落した時から、更に深まるのだから。

そしてそれを励ます力こそが、音楽には求められているのだ。復興には長い季節（とき）がかかる。私は求められるままに、2年ごとに計4回、神戸に足を運んだのであった。

この正月、うれしい年賀状をもらった。『おつきあいしている男性がいます。結婚したいと思っています。一緒に遊びに行きます。お会いしたいです』との添え書きがあった。23才になる娘さんからのもの。あの時、小学1年生の女の子だった。体育館の床に、ぺたんと座って、一緒に歌ったり、笑ったり、たくさんの拍手をしてくれた女の子。

暖かい季節になったら訪ねてくれるだろう若い二人に会えるのが、今から楽しみなのである。

さて、現実にもどろろ。この度の原子力発電所のトラブルから私たちは、人智を超える自然の猛威に抗うことの困難を、学ぶことになった。想定外という言葉、責任のがれの盾として安易に使ってはならない、と思う。地震、津波の天災と、原発のトラブルを同列に論じることはできないからだ。まして、天罰などと。

事がおさまり、被災の地に復興の槌音が、一日も早く響くことを、心から祈り、支援したい。私もその輪に加わりたいと、思っている。

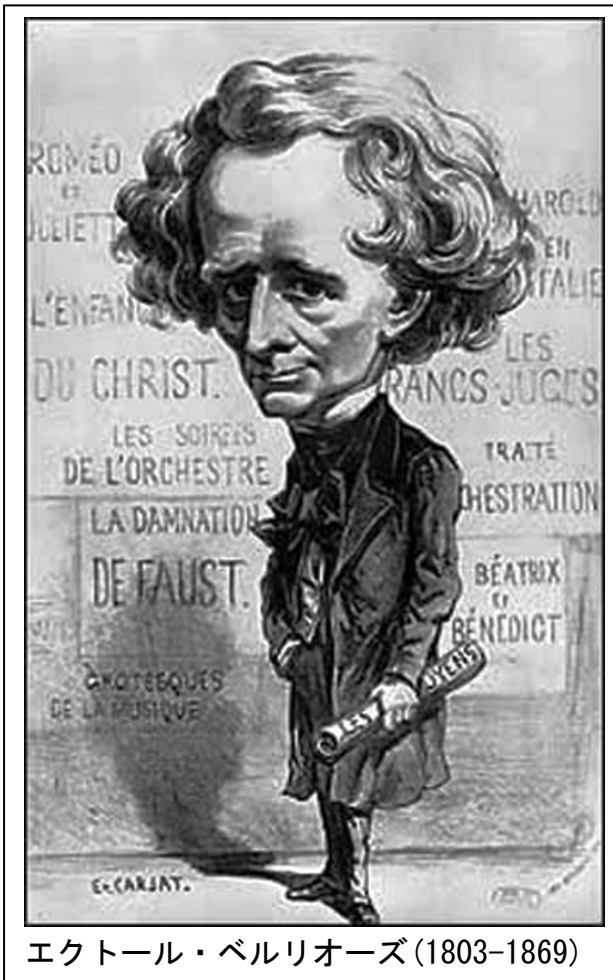
【筆者紹介】狭間 壮（はざま たけし）：中央大学法学部法律学科卒。音楽教育を関鑑子氏に、声楽を大槻秀元氏に師事。大学在学中NHK「私達の音楽会」出演を機に音楽活動を始める。松本市芸術文化功労賞、他を受賞。夫人の狭間由香氏とのアンサンブルで幅広い音楽活動を展開している。





〔第18回〕ベルリオーズの狂気

バッハやベートーヴェンらクラシックの大作曲家というと、とかく私たちには手の届かない別世界の人種・高みの存在というイメージが強いが、音楽的な才能や功績を別にすれば、人間的には私たちとさして変わらない、俗っぽく癖のある人が少なくない。だから身近に感じられて好きだーというのが、永年付き合っているクラシックへの一つの思いである。



エクトール・ベルリオーズ(1803-1869)

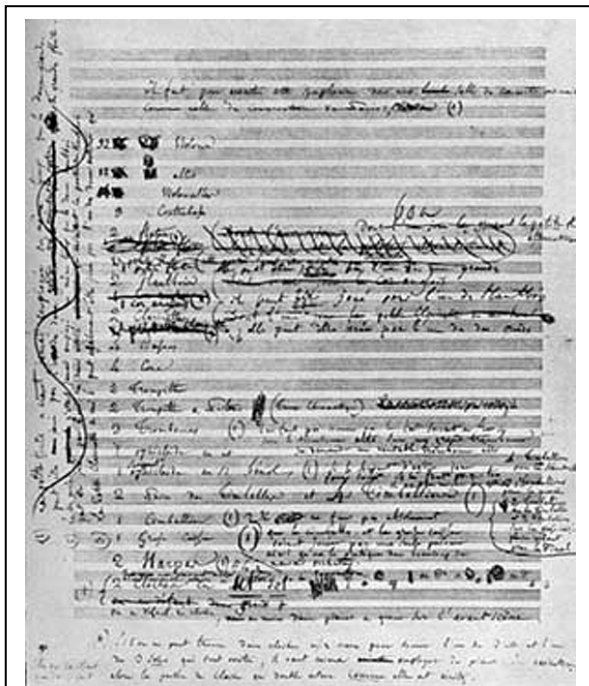
あれこれと伝記などを読んでみると、殺人をした作曲家もいれば暗殺された人もお

り、プレイボーイもいればシャイな人もいる。あるいはケチな人、金銭感覚にルーズな人、要領のいい人・悪い人などいろいろな人が出てくるけれど、中でも印象的な一人は、19世紀フランスの作曲家エクトール・ベルリオーズ(1803~69)である。代表作として知られる「幻想交響曲」の解説を読むと必ず出てくるが、とにかく狂的。生き方そのものが偏執的といつてよいのである。

医者の子として生まれ、医学を勉強するうちに音楽へと転向したのだったが、ピアノは苦手なまゝパリ音楽院に入学し、在学中にイギリスから来たシェイクスピア劇団の公演を観る。そして主役を演じた女優ハリエット・スミッソンに一目惚れすると、ラヴ・レターを送り、周囲をうろつく(私が映画の中のヘップバーンを好きになったようなものである)。当然相手にされる訳もないが、自分が無名なせいだとわかると、自作を集めたコンサートを企画し、招待状を送る。それも無視された彼はようやく諦めるが、その経験を失恋芸術家の挿話という形で一つの作品にまとめる。それが有名な「幻想交響曲」というわけで、致死量に足りなかった毒のせいで見る奇怪な幻想が内容になっている。

ひと区切りをつけた彼は、次にマリー・モークという女流ピアニストと婚約し、すぐ後に有名な「ローマ大賞」(権威ある賞。

4年間のイタリア留学つき)を獲る。結婚は帰国してからと約束して出かけるが、この間にマリーは母親の意向で、楽器メーカーの御曹司カミーユ・プレイエルと婚約してしまう。楽しみにしていた結婚の夢を破られたベルリオーズは、一気に頭に血がのぼった。連中を皆殺しにしてやる！そして死んでやる！と本気でその準備。女中に変装して近づくための衣装、射殺用の2連発ピストル2丁、自殺用の毒薬—そして早速馬車でパリへ。ところが途中の小道でブレーキが故障、修理のために休憩していると、ふと波の音が聞こえてきて、ハッと正気に戻る。やめた！とばかりに留学先のローマへ戻って行った。



「幻想交響曲」最初のページの草稿

奇行は、まだある。それから2年後、1832年に彼はなんとあのイギリスの女優スミッソンと結婚したのである。落ち目となり、大借金を抱えた彼女と、売り出してきたベルリオーズのバランスがとれ、自分に夢中という彼のことに彼女が気づいたせいである。

しかし彼女の借金返済のために働く生活は、しだいに耐えがたくなり、遂には別居。離婚はしなかったものの、若い歌手の愛人マリー・レチオと同棲を始め、スミッソンが亡くなった後、50歳の時に正式に結婚。8年後にはしかし、この彼女にも死なれてしまった。

ここまではご存知の人が多いかと思うが、じつはもう一つ、おもしろい話があるのである。それはスミッソンと結婚して12年後のことだったが、何を思ったかベルリオーズは「音楽都市ユーフォニア」という小説を書いた。西暦2344年が舞台という未来小説で、2人の作曲家の間を渡り歩く女性歌手が、遂にはその一人に復讐されて、金属製の部屋もろとも圧殺されてしまうという、なんとも陰惨な内容。じつは彼を裏切ったさきのマリー・モークをモデルにしているのである。実際の犯罪こそ犯さなかったが、こんな形で結着をつけるあたり、いかにもベルリオーズらしい狂的なエピソードといえるのではなかろうか。

【宮本英世氏プロフィール】1937年、埼玉県生まれ。東京経済大学経済学部卒。日本コロムビア(洋楽部)、リーダーズ・ダイジェスト(音楽出版部)、トリオ(現ケンウッド)系列会社社長を経て、現在は名曲喫茶「ショパン」(東京・池袋)の経営ならびに音楽評論、著述、講演、講座などを行う。著書は「クラシックの名曲100選」(音楽之友社)、「クイズで愉しむクラシック音楽」(講談社)、「喜怒哀楽のクラシック」(集英社)など多数。



第23回
震災と音楽

いま、私たちは東日本大震災から派生する様々な問題に悩まされている。こんな時の救いは芸術鑑賞である筈だが、原稿執筆時点の東京では演奏会、演劇、展覧会とも自粛ムードが広がっている。勿論、大きな余震があった場合に不測の事態を招きかねず、主催者も苦渋の決断で中止にしているのだろう。また、外来アーティストの公演中止には原発問題がデリケートに絡んでいるに違いない。だからといって、何でも中止で良いのだろうか？



私は2001年以来、毎月第三日曜日に阿佐ヶ谷の音楽喫茶ヴィオロンでSPレコード・コンサートを共同主宰している。今回も予定通り3月20日に開催した。地元のお客が多いという事情もあったが、何より、こんな時には自分が社会の中で担っている責任を果たすしかないと思いつたからである。私の本業はCD屋であるからCDをお客様に届けるのが使命、プライベートではSPコンサートを主宰しているから、開催してお客様に音楽を届けるのが使命。実際コンサートには20

人ほどのお客様にお越しいただいた。開催して正解だった。

音楽家の方々にもぜひ立ち上がってほしい。大会場が無理なら近くの公民館や喫茶店で、リアルな場所が危険なら放送やインターネットを活用する手もある。Jポップのスキマスイッチは3月13日、被災者への励ましとしてスタジオでの演奏をYouTubeに掲載した。売名行為との非難など言わせておけばいい。音楽家が送る音楽によるメッセージは、不安におののいている多くの方の心に響き、励ましを与えるに違いない！ ベルリン・フィルやニューヨーク・フィルもインターネットを通じて日本へ音楽によるメッセージを送っている。彼らは「音楽の力」をよく知っている。

第二次大戦で空襲が激化する中、イギリスのマイラ・ヘス、ドイツのフルトヴェングラーは演奏会を開いて同胞を励まし続けた。いま、日本にもそのような音楽家に出てきて欲しいと願うのは私だけではない筈である。

●フランク：交響的変奏曲

(写真 前ページ)

デーム・マイラ・ヘス (ピアノ)
バージル・キャメロン指揮バーミンガム市管弦楽団

[英 HMV C. 3237~38 (SP)]

1941年6月21日録音。マイラ・ヘス(1890~1965)は大戦中のロンドンで演奏会場が次々と閉鎖される中、ギャラリーでランチタイム・コンサートを開き、ロンドン市民を励ました。そんな折の録音。3月13日、私は阿佐ヶ谷ヴィオロンの蓄音器での再生音を YouTube に Up した。
(<http://www.youtube.com/watch?v=MitJfAP46Pg>)

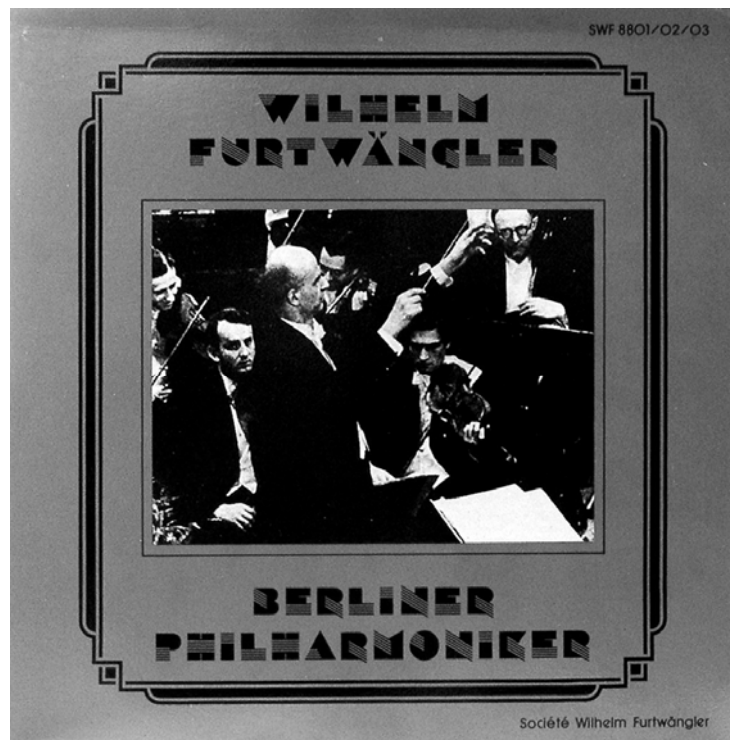
●ブラームス：交響曲第1番～終楽章 (右上)

ヴィルヘルム・フルトヴェングラー指揮

ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団

[仏フルトヴェングラー協会 SWF8803 (LP)]

1945年1月23日ライブ録音。演奏会中に空襲のために停電となり、復旧後に演奏されたブラームス第1終楽章の録音が残っている。ほとんどの聴衆が帰らずに、巨匠の演奏に聴き入ったと伝えられている。



【板倉重雄氏プロフィール】1965年、岡山市生まれ。広島大学卒業後、システム・エンジニアを経て、1994年HMVジャパン株式会社に入社。1996年8月発売のCD「イダ・ヘンデルの芸術」(コロムビア)のライナーノーツで執筆活動を開始。2009年9月、初の単行本「カラヤンとLPレコード」(アルファベータ)を上梓。



関西フィルの前身ヴィエール室内合奏団の創立者、孤高の指揮者宇宿允人が3月5日に亡くなった。3月10日に予定されていたサントリーホール最後の演奏会が中止となり、これでは気力も尽きてすぐに逝ってしまうのではないかと危惧していた矢先だった。朝比奈隆も大阪フィル恒例の年末の「第9」の時間が過ぎたらすぐ亡くなってしまったし、ギンター・ヴァントも棒を振れなくなったらあつと言う間であった。男は仕事ができなくなるとすぐ死んでしまう。そういえば徳川家康も天下を取ったらすぐに逝ってしまったのだが……

指揮者宇宿の前身、N響首席トロンボーン奏者山口治は昭和43年研鑽のため渡米。数ヶ月後朝比奈隆から「君は指揮者になりたいそうだが良かったらウチに来ないか」と大フィル専属指揮者への勧誘の電話が入った。朝比奈がまだ何の実績もない若き宇宿に指揮者への道を開いてくれたのである。渡りに舟とばかりに宇宿はN響を退職。そして大フィルで四年半見習いをやったが、彼が大フィルを辞めたのはヴィエール室内合奏団が軌道に乗って多忙になり留まる必要がなくなったからである。同オケはさらに発展し数年後には管楽器を加えヴィエールフィルとなりルーマニア公演まで果たしているのである。当時の宇宿をサントリーの佐治氏がお忍びで聴き終演後激励したという逸話があるが、佐治氏の励ましに宇宿はズケズケと「そんな言葉より金を出して下さい」と言ったという。まるで安達祐実の「家なき子」『同情するより金をくれ』のようだが、この失礼だが率直な要求に対し佐治氏は顔色も変えず「よし、わかった」と応じお金を集めてくれたそうである。

筆者は25年前、評論家のU先生に頼まれ友人と一緒に宇宿を偵察に行き楽屋を訪ねたらすぐに意気投合し二人で家に泊めてもらって以来、色々あったが、彼の指揮者人生は小澤征爾などとは対照的だった。だが両者ともオーケストラに背かれたという点では一致している。その後小澤が世界に活路を求めたのに対し、宇宿は世を拗ね内にこもることになってしまったのである。

かつて朝比奈はクレンペラーの狷介な人間性をして「難儀な人」と評したことがあった。恐らくその時、朝比奈の脳裏には宇宿の顔が浮かび「そういえば昔、ウチにも難儀な奴が一人おったな」と密かに苦笑したことであろうことは想像に難くない。難儀な人！これほど宇宿の人間性を一言で言い表した言葉が他にあるか。

(あさおか・ひろかず 音楽評論)

～ エレクトーンのための作品コンサート～
COMPOSITIONS 2011

2011年
2月26日 (土)

16:00開演
(15:30開場)

ヤマハ
エレクトーンシティ 渋谷
メインスタジオ
(渋谷駅より徒歩7分)

チケット料金
¥2,500

◆松本 裕樹 (MATSUMOTO Yuki)
小組曲「馬」 small suite "horses" [初演]
1. 白馬(white horses) 2. 黒馬(black horses) 3. 縞馬(zebras)
ELS-01X: 松本 裕樹 (MATSUMOTO Yuki)

◆酒井 隆博 (SAKAI Takahiro)
「鏡鳴～光・音・風～」 [初演]
Mirror Sound ~Light・Sound・Wind~
ELS-01X: 酒井 隆博 (SAKAI Takahiro)

◆西山 淑子 (NISHIYAMA Yoshiko)
コンテンポラリーダンスのための習作 (仮題) [初演]
Etude for Contemporary dance
振付&ダンス: 持田 亜衣 (MOCHIDA Ai)
ELS-01X: 西山 淑子 (NISHIYAMA Yoshiko)

◆橘川 琢 (KITSUKAWA Migaku)
Biotope III 「エレクトーン独奏による《庭園幻想》」作品49 [初演]
Biotope III "The Holy Garden" for Electone solo Op.49
I. 庭園風景 ～ミクソリディア旋法による Garden's landscape - in Mixolydian mode
II. 聖域 The Sanctuary
ELS-01X: 福地 奈津子 (FUKUCHI Natsuko)

◆三宅 康弘 (MIYAKE Yasuhiro)
「Believe - 信ジルチカラ」 [初演] (桑原哲章氏 委嘱新作)
Believe - think possible!
ELS-01X: 桑原 哲章 (KUWAHARA Tetsuaki)

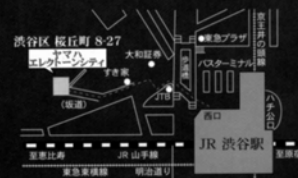
◆菊地 雅春 (KIKUCHI Masaharu)
リコーダーと電子オルガンのための
「サウンドスケープ "森の主と小鳥たち"」 (仮題) [初演]
Soundscape of "The spirit of woods and small birds" for recorder and electronic organ
リコーダー: 吉澤 実 (YOSHIZAWA Minoru)
ELS-01X: 安藤 江利 (ANDOU Eri)

主催: 日本音楽舞踊会議 公演企画部
(The Conference of Music and Dance, Japan)
協賛: ヤマハエレクトーンシティ 渋谷
後援: 全日本電子楽器教育研究会
日本電子キーボード音楽学会
月刊『音楽の世界』

☎ 03-3369-7496 (日本音楽舞踊会議)
<http://www.5c.biglobe.ne/~onbukai/>
03-3476-4700
(ヤマハエレクトーンシティ 渋谷)
03-3955-6249 (西山)

Produced by 西山 淑子 福地 奈津子

Designed by soraço & natsuko



《Compositions 2011 のチラシ》

(先月号に掲載漏れとなったので、掲載します。)
コンサート・レポートは次ページに掲載されています。

この公演はほぼ毎年のシリーズ企画で 1990 年に始まった。日本音楽舞踊会議主催、ヤマハ・エレクトーンシティの協力による。今回で 13 回目になる。2 月 26 日、渋谷のヤマハ・エレクトーンシティで 16 時開演だった。エレクトーンは登場してからまだ半世紀を経していない新しい楽器である。このシリーズはこの楽器のための新作を曲目とする。

これは会評ではない。この日の新作諸作品を聴いて、ここ半世紀の作曲界の歩みに思いをいたすことが多かったのをそれを書きたい。個々の曲について書くことは、作曲者の苦心の労作を短いこま切れの型で寸評することに気が進まない。

この日の作品は若い世代から現役中心、先輩の菊地雅春の世代までが展望できる陣容だった。

総合的に強く感銘したことは、日本の作曲界が、正常な、あるべき姿に回帰したことであった。半世紀前といえば 1960 年代。この時代、世界の作曲界を覆ったのは通称「前衛」と呼ばれる風潮である。英語でも「sixty-years vanguard」という言葉があり、これは世界的な規模のものだった。これには現実社会の動向が当然ながら背景にある。おりしもアメリカはヴェトナムの泥沼にはまり動きがとれず、方々で体制への攻撃が激化した。いまこそ古いものがほろびて新しい時代が始まるという気風があらゆる社会の部分に満ちた。学生運動も世界的規模で高揚し、日本では 1969 年の東大安田講堂の騒動で頂点に達した。こういう時代状況が通称「前衛」音楽の高揚をもたらした。音楽の分野でも、新しい音楽がいまこそ現れるべきだし、また必然的に現れるであろうと多くの人が本気で信じた。そんな時代であった。その背後には歴史には必然の法則があるという迷信があった。

しかし、その後の時代経過はまたまた人々の予想、予測、予言に反するものだった。歴史は予言通りには進まなかった。政治的過激運動は次第に人々から浮き上がり、やがて孤立した過激派は、仲間内の内ゲバ、浅間山荘事件、ハイジャックなどのテロリストと化していった。アメリカはヴェトナムから足を洗って立ち直り、反対に資本主義に代るものであったはずのソ連の方がアフガニスタンへの侵攻で世界的不評との反感を買い、1980年代末期にはチェルノブイリ原発の重大事故で情報の自由流通の不在が世界的非難をあげ、ついに1990年、共産圏の崩壊という、

歴史主義のシナリオの正反対の筋書きとなっていた。歴史の必然という迷信は根底からくつがえたのである。

こうした世界の思想状況が芸術分野に影響しないわけではない。作曲分野でも、通称、自称の「前衛」はいつのまにか勢いが衰えていった。「こんにち調性で作曲する作曲家はもはや無用の存在であります」、という、ピエール・ブーレーズの、いま思えば暴言が本気で人に聞かれた時代から、いつのまにか季節が変わった。ブーレーズのそうした思想の方がむしろ大時代的な妄想に見えるようになった。なにより人々の関心の外に姿を消していったのである。前へ進むほどいいこと、進まないことはわるいこと、そうした進化論がいつのまにか消えた。歴史主義の消滅と敗北である。

哲学者、カール・ポッパは作曲家アントン・ウェーベルンの親友であった。ポッパはウェーベルンの作曲上の誠実さを認めた上で、出来た作品に対しては音楽から縁遠いと評する。ポッパは言う。作曲には二つの出発点がある。既存の音楽をすべて否定し、自分の感性だけを忠実に記述する作曲の方法、もう一つは、既存の音楽を認めた上で、自分もその価値を継承しそこに参加するという方法。この二つの作曲姿勢。ポッパは音楽からの出発が正当であると語っている。私もそう思うが、しかし、「自分から」か、「音楽から」か、という二者の選択は存外難しい。私自身も音楽からの出発を認めるものだが、作曲の途中でいつのまにか、自分出発主義に場所が移動しそうになっているのに気づくことがある。

今回の「COMPOSITIONS 2011」で私が強く感銘したことは、「自分からの出発」派が姿を消したことであった。作曲は自分の表現を他人に受け取ってもらう行為である。いまはやりの言葉で「情報」と言い換えてもいい。発信した情報は受信されなければならない。受信されない発信は失敗である。「自分からの出発」派も、自称通称の「前衛」派も、自分が発信した情報が他人に受信されることを何を根拠に楽天的に信じているのだろう。いや、いたのだろう。ここが不可解で不可思議な所である。非科学的ですらある。

かようなことを痛く感じながら今回の作品群を聞いた。外見の新しさは無用であっても、靈感の鮮度は音楽には必要である。その点でも、すべての曲が中位以上であったことは何よりうれしい経験であった。

(すけがわ・としゃ 本会代表理事)

菊地雅春の音楽 自選集 Vol.1 ～電子オルガン作品を集めて～



本会の、エレクトーンをはじめとした電子オルガンに関わる事業に極めて初期からの深い経験と実績を踏まえてご指導いただいている菊地雅春賛助会員がCDをリリースした。

収録曲は、こよなく美しき・LAST!・猿飛佐助など11曲。演奏家は赤塚博美、安藤江利、上原直、桑原哲章、森下絹代の各氏。本会代表理事の助川敏弥の書くライナーノートがこのCDの紹介に相応しいので許可を得て以下に転載させていただく。

光と地平のかなたへ 作曲家 助川敏弥

菊地雅春の音楽世界には未知の光が充ちている。美とアイロニーのまじわる風景といえるだろうか。このCDには1982年から2008年までの広い時間帯の菊地の世界が展開される。

菊地にとって、楽器 Electone は独自の言語であった。この新時代の楽器が菊地に新しい世界を産み出させたともいえるし、また作曲者の独特の音楽がこの楽器から独自の世界を産み出したともいえる。

最初の「こよなく美しき」から聞こえる、これまで人が知らなかった響き、そこには人の耳がいま初めて聞く響きとしてすでに耽美とっていい非現実の美の世界がある。その音は「アリスの森」からも聞こえる。そして、「猿飛佐助」に聞く諧謔とってよいもの、それはシニカルな品質の動作であり、耽美、諧謔、皮肉、と、意表をつく組み合わせ、菊地の音楽は20世紀イタリアの巨匠キリコの世界を音の世界で実現した。

ここに収録された曲のほとんどは、CMDJ・日本音楽舞踊会議が主催企画する〈compositions〉シリーズへの出品作であり、ここで初演された。この企画は1990年から毎年連続して開催されてきた Electone 作品によるシリーズである。数多くの新作がこの楽器のために生み出された。その中で菊地雅春は、永い経験によって楽器の真髓を知りぬいた類なき実績を果たしてきた。新しい音楽のために、また、音楽を生み出す楽器の今後の開発進展のために、このCDはこれから堅い足場となるだろう。

発売は4月からで、定価3,000円。菊地雅春のホームページからの発注も出来るし、ヤマハ銀座店にも置かれている。 <http://www.geocities.jp/ffcpf833/>

(高島和義)

廣瀬史佳&アダルベルト・スコチッチ デュオリサイタル

報告・高島和義



2月25日。甲府在住の本会青年会員・廣瀬史佳（ピアノ）が、来日中の元ウイーンフィル奏者で、ウイーン音楽院教授のアダルベルト・スコチッチ（チェロ）と、甲府近郊のブライダル・ヴィレッジ ティンカーベルに付属した教会でデュオリサイタルを開いた。

会は前半に、ベートーヴェン：《魔笛》の「恋を知る男たちは」の主題による7つの変奏曲、シューベルト：アルペジオーネ・ソナタが演奏され、後半では、サン＝サーンス：白鳥、ドヴォルザーク：ロンド、ラフマニノフ：ヴォカリーズ、カサド：愛の言葉、ポッ

パー：ハンガリー狂詩曲とチェロのための小品が演奏された。アンコールには廣瀬のピアノソロでのモーツァルト：トルコマーチを初め、フォーレ：夢のあとに、ショパン：ノクターン、カザルス：鳥の歌、ラヴェル：ハバネラ形式による小品の5曲が演奏された。

前半の大曲をスコチッチはやや古めかしい音色ながら軽々と軽快に弾き進め、廣瀬は、この会場が自慢の1907年製作と100年を超すスタインウェーで、さすがに年代もので各所に瑕瑾は見られるが、行き届いた手入れでの興味深い音色を実に巧みに引き出しながら手堅い技巧で見事に流れに乗って行った。やや早めの速度で奏されたシューベルトは、実に限りなく爽やかな心に残る演奏だった。

廣瀬はスコチッチとデュオを組むのは二度目との事だが、愛娘に対するようなスコチッチの眼差しに支えられてか、後半に入っては、時に激しく渡り合いながらも温もり深い二重奏を組んで行った。曲が進むにつれ、廣瀬の中にデュオへの確信が生まれたのでは無いかとも思える瞬間を何度も聴いた。実に親愛感と信頼感に溢れた心温まる音楽が聴けた。

聴きなれた「鳥のうた」だが、この演奏会の音楽が未だに耳から離れない。

（たかしま・かずよし オーディオ会員）

《音楽の世界 3月号の訂正》

29頁最下段

正：（さとう・ローデン・ちえ 本会アドバイザー（ピアノ）：米国在住）

誤：（さとう・ローデン・ちえ 本会 ピアノ会員：米国在住）

37頁下から18行目

正：中島恒雄（なかじま つねお 作曲・指揮 山梨大学名誉教授）

誤：中島恒雄（作曲 山梨大学名誉教授）

《明日の歌を》— 楽友邂逅点 ガクユウカイコウテン —

橘川 琢

第三回 上野雄次 花と音、生と時間の求道 (1)



情勢厳しい「今」のただ中で日々模索する音楽人・芸術家。自ら信じる《明日の歌》を奏でながら発し続ける「現場」の声・その後ろ姿は、ともに旅する友のエールに似ている。

三回目は、「花道家」として、「花いけ所作」というスタイルを通して「生」を模索している上野雄次氏に、対談形式でお話を伺いたと思います。

■上野雄次 (花道家)

1988年、勅使河原宏の前衛的な「いけばな」作品に出会い、華道を学び始める。国内展覧会での作品発表の他、バリ島、火災跡地など野外での創作活動、イベント美術なども手がける。

2005年、「はないけ」のライブ・パフォーマンスをギャラリーマキで開始。地脈を読み取りモノと花材を選び抜き、いけることの独自の生きる世界を立ち上げ続けている。

創造と破壊を繰り返すその予測不可能な展開は、各分野から熱烈的な支持を得ている。詩人、写真家、ミュージシャン、工芸家等とのコラボレーションも多数行っている。 <http://ugueno.com/>



■橘川 琢 (作曲家・日本音楽舞踊会議理事)



作曲を三木稔、助川敏弥の各氏ほかに師事。文部科学省音楽療法専門士。文化庁「本物の舞台芸術体験事業」に自作を含む《羽衣》(Aura-J)が採択される。『新感覚抒情派(「音楽現代」誌)』と評される抒情豊かな旋律と日本旋法から派生した色彩感ある和声・音響をもとにした現代クラシック音楽、現代邦楽作品を作曲。現在、諸芸術との共作を通じ、美の可能性と音楽の界面の多様性、さらに音楽の存在価値を追究している。

「華道」ではなく「花道」。問いかけに静かに耳を傾け、言葉を慎重に選ぶ、穏やかで思索的な口調。自身の花いけを「静」「動」の面から捉えて表現を展開し、ときに音楽をはじめ多くの分野とのコラボレーションをしながら模索を続ける姿は、文字通り「花」と「生」の意味を求める求道者のようでもある。

■コラボレーション・・・諸芸術との界面 ～花道家として

——上野さんとは、詩人の木部与巴仁さんを介して、拙作詩歌曲「花の記憶」（初演：日本音楽舞踊会議作曲部会公演「7+1の音像」（2008年10月20日））からのご縁で、その後何度作品もご一緒させていただいております。ありがとうございます。

「いえ、こちらこそ。いつもありがとうございます。」

——私が特に記憶しているのは、花いけという行為と音楽というものの接点が、これから書かれる五線紙の上のどこに見出せるか、私自身が大変な手探りであったということ、そして演奏会前、上野さんがコンサートホールを事前に見学させてほしいというお話をしていたらしゃったことです。

上野さんとご一緒するまでは、お恥ずかしながら私の中で花を扱う方のイメージに、ここまで音楽等の他の分野の方と一緒にやろうとする姿というものがあまりありませんでした。この機会にコラボレーションされる上野さんの創作哲学、コラボレーションの視座を改めてお聞きしたいと思ひまして。

「僕は音楽に限らず、何とでも交わるべきだと常々おもっています。橘川さんとよくご一緒している「トロッタの会」の活動で言うと、音楽だけではなく、詩の朗読、言葉の世界とともに、あとテキストがあるということでは文学の世界とも接点を得ている訳で。音楽だけに特別視している訳ではなく、たまたま機会が多いということだと思います。」

——《花の記憶》の際は、上野さんの花いけの姿を、詩人の木部与巴仁さんが詩にして、私がそれを読み作曲。それを演奏会では木部さんが詩唱（朗読）し、演奏家が演奏し、その上で上野さんが活けるという創作の連鎖で表現されました。言葉の世界、音楽の世界、文学の世界、そして舞台芸術や演劇性・・・これらが重なって一つの舞台を、演奏会を創っている。上野さんから見て、こういった多くの分野の界面が接する舞台での関わりにおいて、特にご自身の立ち位置として考えられていることは？



詩歌曲《花の記憶》終結部。舞台中央、上野雄次氏。

鉛の壺が引裂かれ、中から無数の薔薇の花びらが溢れ出る。
（「名フィルの日」2009年8月2日／名古屋しらかわホール）

「そうですね・・・音楽だけでなく、その他のすべてを含めて僕はどんな関わりが出来るのか、しようとしているのか、まずその軸がずれないようにします。多少の逸脱はあっても良いかもしれないけれど、『多少の逸脱だよ』の認識でおさめ

ていなければ見る人が混乱してしまう。基本軸がどこにあるのかということ、やっている側が見失ってしまったらそれはもう、見る側にしたらよけい大変なことになってしまいますしね・・・。

あと、空間全体をバイブレーションで捉えることでしょうか。その中でも音楽は非常にダイレクトなバイブレーションだと思うんです。」

——空間全体のバイブレーション、ですか。

■コラボレーション2 空間のバイブレーション（振動・波動）

「実際、ぼくは視覚的な情報も、空間も、バイブレーションで見えています。それは木であれば木の素材の持っているバイブレーション、木でも色身の違いによって放っているもの。形、量感によっても作り出す波の大きさも違う。」

——バイブレーションを定義づけると、波長、波動、振動、広く取りますと雰囲気や存在感・・・ですか？

「ええ。特に波動ですね。厳密には視覚的にとらえている。物には波長、波形が確実にあり、全て物が放っているというイメージです。それが小さいバイブレーションもあれば大きなものもあり。量感が大きくなれば、与える影響力も大きくなってゆく。」

——なるほど。

「それは実際測ってどうこうしている訳でなくて、視覚的にその波長や波をとらえようとしていて、その組み合わせを大切にしています。それが音楽や音ともそうですし、詩の朗読もそう。一緒にやったらどういう効果を生み出すのか。その中で、生け花自体はと考えて、空間とのバイブレーションを合わせてゆく。またはコントラストをつけてゆく。」

——波長を合わせる、コントラストをつけるということですか。それが特に音楽との場合においては・・・？

「音楽と関わらせてもらうことに関しても全く同じことが言えて、音が持っている色調とか、スピード感とかによって、どんなバイブレーションがあるかを考えます。最終的に舞台上のその波長が組合わさったときに、それを受けた人がどんな感情を覚えるか・・・ということの組み合わせによって、その中でのバランスを考えます。」

——なるほど。音楽の鳴っている時の全空間との振動や、そして自分と花とをトータルとしてまず捉えるわけですか。

■生きるということ 生命の自然な姿

———ところで、花いけについてお聞きしたいのですが、これは以前上野さんからお聞きしたのですが、花いけは重力に反するように起立してゆく植物の美でもあると。

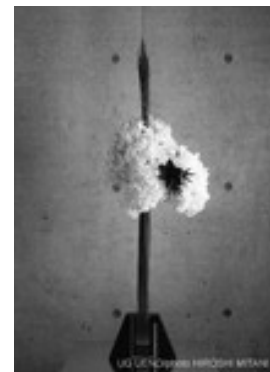
「ええ。・・・ぼくらは重力に支配されているから、どうしてもこの地球上に存在する物というのは、重力に対してどんな形を生み出すかということにすべての目的が向かっていると思います。従うにせよ、反発するにせよ、重力との関わりは大きなテーマでもありますね。元々植物や僕ら人間もふくめて、地球上で生きているということは、重力と関わりをきることが出来ない。植物の美しさの一つとして、重力に反することを美しさとして人間がとらえているということもあるんじゃないでしょうか。」

———なるほど。

「たとえば、ススキの場合、すうとのびやかに伸び上がって、ふわっとゆらぐ姿。葉っぱが根元からクッと強い意志として立ち上がっているけど、その後上の方では風になびきながら、しなやかに、重力に反せずに、やわらかく重力のバランスにもどりつつある。そういうバランス。ここに「生きる」ということの自然のバランスを感じ、人間はそれを美しいと感じるところがあるんじゃないでしょうか。」

———考えてみたら、植物も生き物。生きるためにはどうしたら良いかというバランスを、形を見せている。すっと立つもの、地面を這うもの、からまって伸びてゆくもの、みんな自分の一番生きやすいもの、生き延びるために必要に応じて生まれた造形ですね。それは勿論自然な姿に感じますし、バランスとして美しくも見えますね。

「より多くの光を浴びるためだったり、風に耐えるためだったりして、環境に合わせてそこに存在している物が、適正に合う形を目指して、常に変化していますよね。環境に応じて、緩やかな変化に対応している。それが『生きる』ということそのものだと思います。」



上野雄次公式サイトより
(写真：HIROSHI MITANI)

■無為自然の美、素材が生きるということ

———ここでちょっと強引に音楽に敷衍してみますと・・・音楽を創っていていつも思うのは、これは師匠から教わったのですが、作曲家といえども音を自由気儘に扱って良いものではない。物理法則のように水が上から下に流れるように自然であることを、流れを意識しなくてはならないということです。

そして私自身、12年作曲をし続けてようやくメロディやリズムやハーモニーなどの音楽の断片の着想を得た場合、それがどういう風に決着するかというのが、最初の素材を見ていると少しずつ見えてくるようになってきました。こういうメロディ、この素材は、5分くらいの可愛らしいかたちにおさまることが自然なんだと見えることもあれば、別の素材のこれは歌になるのが自然であると感じたり、もっと時間のかかる大型の交響曲的作品に向いていたり・・・。

「ええ。」

——素材を前に、これはどういう風に発展するタネなんだろうかと、こちらから「素材そのものが望む成長の姿」というものを考えなければいけないと考えています。作曲を生物の成長記録のように考えて。そのタネにとって合わない環境、合わない土壌、そして合わない育て方をしても、結果的には、いつまでたっても形にならない、出来てもどこか不自然な出来映えであったり・・・。素材の持っている命に対して自然になるにはどうすれば良いか。素材を強引に自分のノウハウに落とし込んで本来ではない姿に成長させるのではなく、素材の自然な育て方を識(し)るのも、作曲家の仕事じゃないのだろうか。

「音楽においても花においても、まったくその通りなんだと思います。小さなメロディとおっしゃったのが、花ならこう・・・楚々と低く咲いているような野花であったり。花をいけるということは、その自然な野花が持っている世界観を、どんな環境で、どんなバランスで感動的な形に見せ、活ければ良いのかを考えるということ。

一つの命が最終的には大きな宇宙観のところまで行くようなイメージまで届くようなものになるためにはどうしたらいいのか。もっとこう、見る人の心のひだに触れてゆくような鮮やかなアプローチの仕方をするにはどうしたら良いか。野にあればそのままでも美しいものを、こうして今この空間でいけるという意味は何かを常に考えています。花をいけるということは実際大変劇的なアプローチなのだと思います。」



上野雄次公式サイトより
(写真：HIROSHI MITANI)

——なるほど。花を音楽に置き換えても通じそうな、興味深いお話です。コンサートホールなどでの音楽は、主に、自然界にそのまま自然にある音ではなく、人間が「楽音」など音楽用の音響を作り、作曲し、自分たちで意図的に鳴らす行為です。「劇的なアプローチ」とは、単に外見的パフォーマンスを指す訳ではないようですね。その辺りについて、さらにお聞かせいただけませんか。

(於：2011年3月1日 THE RITZ-CARLTON TOKYO ザ・ロビーラウンジ)

次回、互いを生かし合う「花」と「器」の関係、そして花と音楽・・・それぞれの立ち位置からの生命観と関わり方について、さらにお話を伺います。
(続く)

現代音楽見聞記 (2) 2011 年 2 月 アーカイヴから新しい創作へ

音楽評論 西 耕一

團伊玖磨の夕鶴が国内外上演数 800 回を超えた。これは 2 月 4、5、6 日に計 3 回の公演を行った新国立劇場と筆者で行った調査で判明したこと。日本作曲界の快挙といえよう。回数計算方法は管弦楽による全 1 幕完全上演を 1 回とする。抜粋やピアノ版を数えないのは原作の木下順二との約束「原作を一字一句変えずに作曲する」に由来する。團本人が関わった 1994 年 600 回記念公演の公式発表以来、650 回を超えとか 700 回に及ぶとか曖昧な表現で人気を形容された夕鶴だが、筆者の知る限り責任ある調査として発表されたものは 600 回と今回のみ。ゆえに 700 回記念公演はなかった。これはメディア・研究・企画関係者が話題とすべき情報を逃した、と簡単に言い切れない大きな問題がある。昨今はアーカイヴ運動が各分野で進んできているが、音楽家の遺族が価値を知らずに、否、知っていても楽譜や資料を捨てることもある。本来は公的団体が収集保護公開すべきであろうが、民間で続けた日本近代音楽館が閉館する我が国である（現在は明治学院大に移管）。音楽舞踊会議に関係する内容であれば、日本の舞踊・バレエ音楽の楽譜やテープのアーカイヴは作曲家以外の手でも進むべき。思わず風呂敷を広げてしまったがこの欄は文字数限定があるためこれ以上は別機会を待とう。過去を知っての新しい創作であるべきと筆者は思っているのだが...

2 月の収穫としては、トーキョーワンダーサイトにて 17~27 日にあった TOKYO EXPERIMENTAL FESTIVAL である。同時開催の現代音楽セミナーなども交えサウンド、アート、パフォーマンス関連の公演が多数あり。自己のビデオ映像と大道芸的 Duo となるメリ・ニクラ、無声映画に絶妙なるピアノ即興で自在に音楽を添えた神崎えり、マイクに吹きつける息を増幅再生させ空間を体験させたカーラ・チスノ、自作楽器で構造戯画となるコンポジションマシン、眠具を用意し観客を眠らせるための即興、眠り人のための演奏会、真暗闇で参加者を組織して即興発声へ誘い自由即興集団発声で音と一体化させるクラヤミノ tones、12 面の箏による箏衛門、アンサンブルモデルン講習会を経た生徒の演奏会では一柳慧の素材によるトーキョー初演等。6 日東京フィル×鼓童へは岩代太郎委嘱で交響組曲摩天楼初演。8 日文化会館鑑賞室の Arion 邦人展は安藤由布樹の p トリオ民族舞踊風組曲が土俗性愉し。遠藤雅夫の p エチュード 13 番も雰囲気ある。11 日アンサンブル東風のノルウェー現代曲特集はネスの vla 協奏曲、グレンナーゲルの声と管弦楽の曲等特筆もの。同日、探楽愉快 Vol. 3 ではニッポニカ団員の p 河野航、vn 加藤のぞみが 3 人の会の室内楽を特集。11、12 日松下功の歌劇遣唐使が藝大で東京初演。16 日、木部与巴仁による詩唱ソロ。普段音楽伴奏朗読の木部がソロで関係者のみに行った。全身表現者の木部にとって無伴奏の純粹に勝るもの無し。圧倒的。23 日「日本歌曲と音の魔術師たち」は第 42 回別宮貞雄。26 日 CMDJ のエレクトーン新作展、現音は ISCM 特集。筆者の 2 月は 20 回の見聞なり。

(にし・こういち 賛助会員)

歌ってみたい！弾いてみたい！心に残る日本の作品

日本音楽舞踊会議の出版楽譜のご案内

昨年10月号より始めました「日本音楽舞踊会議の出版楽譜のご案内」は、本誌裏表紙に掲載されていましたが、本会出版楽譜を隔月で紹介するコーナーです。

今回はコンテンポラリージャズの第一人者であり、本会公演局長である北條直彦氏の「ピアノのためのヴィジョン」をご紹介します。即興的な自由な発想による心象風景が、現代的な音の遣い方により表現されている個性的な作品。新しい傾向の作品を探している方には喉から手が出るくらいに欲しい作品。是非お求めいただきレパートリーに加えて下さい。尚、残部は希少になってきています。(本会事務局へお問い合わせください。)

さて、今回は異色の作曲家、金籐豊氏のピアノ作品をご案内いたします。

「ピアノのためのトッカータ」Toccata—interactive for piano (1994年)

独立した4曲の小品で構成された作品。

ここに描かれているのは、日本的な「音空間」や「間」を生かした音楽の流れであり、それは「禅」にも共通する、自由で束縛のない世界観。

「水墨画」や「茶の湯」の自由な表現にも似た、ピアノで表す心象風景。

(中級) A4版 16頁 1680円

ここで、この作品を作曲した金籐豊氏とはどのような作曲家なのか、「ちょっと一息、出版楽譜コーナー」を兼ねまして、作品にまつわる話や裏話、作曲者の創作姿勢等を紹介します。作品を手にとって頂いた時の手引書としても活用してください。

金籐氏についてピューリタン(筆者)以外、ほとんどの方はご存知ないかもしれませんが、金籐氏はバンドを組んで、ジャズやポップスの演奏でピアノを担当していたミュージシャンでした。それこそ、夜の新宿・渋谷・池袋等で活躍をしていました。

しかし、この作品を弾いてみると解かりますが、作品の中にジャズやポップス等の影響は見えません。それを裏付けるように、彼の師匠である作曲家の故清瀬保二氏の言葉を回想して「君の書くものにはジャズのようなものが全くないね」と言われたことが有ると金籐氏は話していました。

また、クラシック等の洋楽についても「大体あのコードとか、コード進行とかいうやつ、あれは全く遣う気にはなれませんでした。それにあの3度を基調とした和音というやつ、和声学と称する分厚い本が、部屋の棚の上でほこりをかぶっている。」とか「外国人は何人か集まると、すぐに声を合わせて和音を響かせる“素晴らしいわね”、止めてくれよ。あれは彼等が教会で賛美歌をやって身につけたものじゃないか。」というように金籐氏は語っていますが、これ等は全て金籐氏一流の強弁であり、他人には大いに誤解の生まれるところではありますが、本心は創作にあっては、ジ

ジャズや洋楽等の形や形式にとらわれずに、心の奥で鳴り響く音を忠実に聴けという言葉の裏返しです。

創作の原点を洋楽的知識に負うのではなく、日本人である自分を原点に、自由にそして忠実に心の中に響く音を聴くという事では、金籐氏は一貫して頑なに姿勢を守っています。

もちろん、偏狭的な意味で言っているのではなく、広く他の文化の有り方を理解した上で、他人の作った文化で自己の創作を築くのではなく、眼目を自分に置くという意味です。この事は、彼の師匠である故清瀬保二氏の創作姿勢とも共通していて、作品のスタイルは全く異なりますが、大きな影響を受けていると言えましょう。

「ピアノのためのトッカータ」

この作品は、ピューリタンが弾いて確認したところ、4章からなっていますが、それぞれ独立した4つの小品で構成されていて、その4つの小品は単独で演奏されてもよいと、解釈してもいいのではないかと思います。

作品の書法は、一見すると即興的に書かれているように見えますが、弾いて確認してみると、作曲者は一つ一つの音を確かめて音を定着させていることが窺（うかが）えます。

また、楽譜に縦線が引かれていますが、拍子が記入されていないので、この縦線はフレーズのまとめ位に解釈した方がよいでしょう。

楽曲の成り立ちは、特に主題や旋律の動機が、造形的に展開していくという、洋楽的語法を遣った作り方ではなく、そこには主題となるような旋律は有りませんが、日本的な旋法を駆使した、音形や形式にとらわれない、自由で即興的な効果を狙った音楽の流れを、作風の基に据えるような作り方をしています。

それは必然的に、形に囚われない音楽的な流れを重視し、音と音の「間」や「空間」を大切にすることが、演奏に際し作品の内容をより効果的に発揮できることと思います。

洋楽的形式感や造形性を音楽の基本に考えている人には、音楽の形がはっきりしないところを嗤（わら）うかもしれませんが、「禅」のように、形に囚われない考え方もあるので、こういう音楽が有ってもよいのではないのでしょうか。

以上、演奏される時の手引として参考にさせていただき、この作品を演奏家の皆様の手で、聴衆の耳にお届けください。尚、本作品は本会事務所に有りますので、本誌裏表紙に掲載されている奥付に、連絡先が記載されていますのでご連絡ください。（本作品は、本会事務所保管数が少ないので、お求めの方はお早めにご連絡下さい。）

＜出版楽譜ニュース＞

2012年本会創立50周年記念事業の一環として、本年新たに出版される楽譜

を含めて、「楽譜出版記念コンサート」を行う予定です。日時は、来年2012年3月12日すみだトリフォニーホールを予定しております。

本会出版局出版楽譜部 ピューリタン高橋

Toccata - interactive - I

Yutaka Kanetō

♩ = 30-40 *singing*

mf *8va* *con. Ped*

sfz *mf* *8va*

mp *f* *mf* *mf* *R.*

Tempo rubato (Bamboo wind)

swift *simile keep a note (not cluster)*

ad. libitum *mf* *8va* *sfz* *sfz*

R. *L.*

----- *riten.*

sfz *mf* *♯*

mf *f* *mf* *mf*

♩ = 70-72

mf *f* *mf*

♩ = 58

mp

R. *f* *mf*

金藤豊作曲 「ピアノのためのトッカータ」 第1ページ

piu mosso
 mf L.H.
 con. Ped
 swift
 8va
 mf
 R. L.
 8va
 sfz f mf
 R. L.
 82-90
 f con. Ped
 R.
 8va (swift)
 ff mp mf
 R.

2

金藤豊作曲 「ピアノのためのトッカータ」 第2ページ

“Fresh Concert” - CMDJ 2010 -

～より豊かな音楽の未来をめざして～

2011年4月8日（金） 18:30 開演

すみだトリフォニーホール 小ホール

主催：日本音楽舞踊会議／月刊『音楽の世界』

《ごあいさつ》

コンサート当日まで1ヶ月を切った3月11日に、我が国は未曾有の大震災に見舞われました。多くの方々が震災で亡くなられ、また多くの方々が不自由な避難生活を強いられ、我々も計画停電などを余儀なくされている状況下で、はたして予定通りコンサートを開催すべきかどうか悩みましたが、こういう時であるからこそ、これから巣立って行こうとしている若い音楽家たちに、演奏を通してお客様と音楽を共有することの喜びを噛みしめながら、精一杯演奏してもらいたいと考え、予定通り開催することを決断しました。

本会は、音楽文化の土壌を耕し、よりよい音楽文化環境の実現のため、月刊の機関誌発行、コンサート、研究会開催など、地道な活動を積み重ねてまいりましたが、厳しい社会、経済状況の中で、若い才能を発掘、育成することも、長い歴史を重ねて来た音楽文化団体として果たすべき社会的、文化的使命の一つと考え、2003年度から毎年3月下旬～4月上旬に『Fresh concert』を企画してまいりましたが、本年度で第9回目を迎えます。

本年度は、15人の若い音楽家達を世に送り出しますが、伴奏者を含めて20人の方々が、このコンサートを目指して研鑽に励んでまいりました。

いま、我が国は非常に困難な状況におかれておりますが、若い音楽家たちの熱演が、皆様に感動と勇気を与えてくれることを願っております。そして、演奏する者と聴く者が音楽を通して心を通わせ、明日への希望を紡ぐことが出来れば、この上もない幸せと考えます。

日本音楽舞踊会議	代表理事	助川敏弥、深沢亮子
	理事長	戸引小夜子
	公演局長	北條直彦
	コンサート実行委員長	中島洋一
	コンサート実行委員	栗栖麻衣子

【出演者略歴】



北風 紘子 (きたかぜ・ひろこ：ソプラノ)

国立音楽大学演奏学科声楽専修卒業。
洗足学園音楽大学院修了。秋山理恵氏に師事。

稲葉 千恵 (いなば・ちえ：伴奏ピアノ)

国立音楽大学演奏学科ピアノ科卒業。アンサンブルピアノコース修了。ピアノを藤原弘江、梅本実の各氏に師事。伴奏法を平島誠也、安井耕一の各氏に師事。現在、上級アドヴァンストアンサンブルピアノコース2年次在学中。



高橋 健介 (たかはし・けんすけ：ピアノ)

埼玉県立大宮光陵高校音楽科ピアノ専攻卒業。現在、東京芸術大学楽理科2年在学中。

第16回埼玉ピアノコンクール中学生部門銅賞。

第31回ピティナ・ピアノコンペティションE級全国大会入選。

ピアノを森山あす香、平田博通、北川暁子の各氏、音楽学を野本由紀夫、和声学を遠藤雅夫に師事。



鎌田 亮子 (かまた・りょうこ：ソプラノ)

平成21年、国立音楽大学演奏学科声楽専修卒業。

平成23年、同大学院フランス歌曲コース修了。

声楽を秋山理恵氏に師事。

前田 明子 (まえだ・あきこ：伴奏ピアノ)

島根県出身。国立音楽大学 音楽文化デザイン学科作曲コース卒業。現在、同大学院、作曲科2年在学中。作曲を森垣桂一、北爪道夫、ピアノを白川浩、長尾洋史の各氏に師事。



申 恩珠 (シン・ウンジュ：ピアノ)

ソウル芸園学校 卒業。

ソウル芸術高等学校 在学中留学。

オーストリア ウィーン国立音大 卒業。

東京芸術大学 大学院 修士課程3年 在学中。



今井 梨紗子 (いまい・りさこ：ソプラノ)

2004年フェリス女学院大学音楽学部声楽学科卒業。

2005年同大学ディプロマコース修了。

2010年日本オペラ振興会オペラ歌手育成部第29期生修了。

第76回横浜新人演奏会、藤沢音楽家協会第2回推薦音楽会に出演。牧山静江、古川博子の各氏に師事。

渡邊 美文 (わたなべ・みふみ：伴奏ピアノ)

フェリス女学院短期大学音楽科ピアノ専攻卒業。同校専攻科修了。

第60回読売新人演奏会出演。

フェリス女学院大学音楽学部ディプロマコース修了。

古川五巳、河野元の諸氏に師事。



加藤 千理 (かとう・ちさと：フルート)

愛知県立明和高等学校音楽科を経て、国立音楽大学卒業。

フルートを大海輝子、大海隆宏、大友太郎、立川和男の各氏に、室内楽を杉浦直基氏に師事。

P. E. デイヴィス、M. モラゲス、Ph. ベルノルドの公開レッスン受講。

第57.58回全日本学生音楽コンクール名古屋大会第3位。

第15.16回日本クラシック音楽コンクール全国大会入選。

椎野 未花 (しいの・みか：オーボエ)

神奈川県出身。国立音楽大学演奏学科卒業。オーボエを小林裕、北村貴子の各氏に、室内楽を生島繁、杉浦直基、井上昌彦、坪井隆明の各氏に師事。また、ダヴィッド・ワルター、エマニュエル・アッビュール、クララ・デントの各氏のマスタークラスを受講。第4回横浜国際音楽コンクール管楽器部門大学の部第2位。現在、国立音楽大学アドヴァンストコースに在学中。



譽田 未季 (こんだ・みき：クラリネット)

神奈川県出身。神奈川県立多摩高等学校を経て国立音楽大学を卒業。

これまでにクラリネットを郡 尚恵、エマニュエル・ヌヴェー、亀井良信、生島 繁、室内楽を生島 繁、杉浦直基の各氏に師事。

第4回ヤングクラリネットティストコンクール入選。

第18回、19回欧日音楽講座受講。

第22回欧日音楽講座にてビュッフェ・クランポン奨励賞受賞。

小林 香緒理 (こばやし・かおり：ファゴット)

1990年宮城県仙台市生まれ。
13歳でファゴットを始める。
これまでにファゴットを水野一英、吉田将に指示。
室内楽を杉浦直基に指示。現在国立音楽大学学部3年次在学中。



齋藤 嵩之 (さいとう・たかゆき：ホルン)

東京都出身 国立音楽大学卒業。
ホルンを大野良雄、井手詩朗、西條貴人、阿部麿の各氏に、室内楽を井手詩朗、杉浦直基、阿部麿の各氏に師事。アップ・コスター、ブルーノ・シュナイダー、シュテファン・ドールの各氏のマスタークラスを受講。第9回日本アンサンブルコンクール室内楽部門優秀演奏者賞 全音楽譜出版社賞 第9回大阪国際音楽コンクールエスポワール賞受賞。在学中、学内での室内楽オーディションに合格。現在国立音楽大学上級アドヴァンストコースに在籍中。

草間 葉月 (くさま・はづき：ピアノ)

東京都出身。私立山脇学園高等学校を経て、国立音楽大学を卒業。アンサンブル・ピアノコースを修了。
在学中、学園祭にて学生オーケストラと共演。第84回ソロ室内楽定期演奏会(アンサンブル)に出演。
これまでにピアノを浅川みつ子、星野明子の各氏に、室内楽を星野明子、三木香代、菊地真美の各氏に師事。現在、国立音楽大学上級アドヴァンストコースに在籍中。



坂本 久美 (さかもと・くみ：ソプラノ)

国立音楽大学演奏学科声楽専修卒業。
同大学大学院音楽研究科声楽専攻歌曲コース修了。
秋山理恵氏に師事。

森田 真帆 (もりた・まほ：伴奏 ピアノ)

桐朋学園大学演奏学科ピアノ専攻卒業。卒業演奏会に出演。国立音楽大学大学院器楽専攻伴奏科修了。
アジアクラシックコンクール優秀賞。ディヒラー・サトウコンクール第2位、飯塚新人音楽コンクール第3位入賞。ピアノを玉置善己、山崎牧子、近藤伸子の各氏に師事。
歌曲の伴奏者として、数多くの日本音楽舞踊会議主催コンサートに出演している。





北村 真紀子 (きたむら・まきこ：ピアノ)

北鎌倉女子学園高等学校音楽科卒業。桐朋学園大学音楽学部ピアノ科卒業。学内にて選抜演奏会出演。

現在桐朋学園大学院大学修士課程2年。

04年静岡ピアノコンクール一般の部第1位。並びに静岡市長賞受賞。

05年アールンピアノコンクール大学の部第1位。並びにシューマン賞受賞。06年ドイツ・ライプツィヒにてユーロミュージックフェスティバルに参加。07年ロゼピアノコンクール一般B部門第2位。

08年ショパン国際ピアノコンクール inASIA アジア大会奨励賞受賞。同年横浜国際ピアノコンクール特別賞（三井賞）受賞。09年大田区文化振興協会主催「アプリコお昼のピアノコンサート vol.10」大田区民センター大ホールにてソロコンサート出演。

10年IMC音楽出版主催「室内楽の夕べ」にてザルツブルガーゾリステンとピアノ五重奏を演奏。日本音楽舞踊会議青年会員



大武 彩子 (おおたけ・あやこ：ソプラノ)

東京都出身。国立音楽大学演奏学科声楽専修卒業。同大学大学院修士課程声楽専攻オペラコース修了。現在、博士後期課程声楽研究領域1年在学中。在学時にソロ・室内楽第79回定期演奏会～ソロ・コンサート秋～及び卒業演奏会等に出演。2010年大学院オペラ《コジ・ファン・トゥッテ》ではフィオルディリージ役で出演。これまでに声楽を岩森美里、和澤康代の各師に師事。

齋藤 亜都沙 (さいとう・あづさ：伴奏ピアノ)

国立音楽大学附属高等学校卒業。現在、国立音楽大学鍵盤楽器専修ピアノ科4年、鍵盤楽器ソリストコース在籍。岡田九郎奨学金授与。附属高等学校創立60周年記念コンサート、招待演奏会、ソロ・室内楽定期演奏会等出演。これまでにピアノを五十嵐稔、五十嵐恵子、福田ひかり、梅本実の各氏に師事。また学内に於いてダン・タイ・ソン、エヴァ・ポブウォツカ、ミシェル・ベロフの各氏による特別レッスン受講。2009年サイトウ・キネン・フェスティバルにてリート解釈を白井光子氏に師事。



鄭 胤先 (ジョン・ユンソン：ピアノ)



1982年 韓国の光州生まれ。98年 光州藝術高校 入学。

00年 韓国経済新聞社主催 音楽コンクール特賞。全州日報主催 音楽コンクール大賞（文化部長官賞）、原鑛大学 音楽コンクール2位。湖南神学大学音楽コンクール1位、大拂大学音楽コンクール1位。錦湖ジュニアコンサート出演、嶺湖南交流音楽会出演。01年 国民大大学音楽学部（ピアノ専攻）に入学。

02年 プライムフィルハーモニックオーケストラと協演。

03年 国民 フィルハーモニックオーケストラ全巡回演奏協演。

08年 東京藝術大学 大学院入学，現在、東京藝術大学大学院修士課程在学中。

【曲目解説】

中島 洋一

フォーレ 『ある日の詩』より 1めぐり逢い 2いつまでも 3さよなら
G.Fauré 『Poème d'un jour』 1 Rencontre 2 Toujours 3 Adieu

ガブリエル・フォーレの歌曲作品は、我が国においても、数多くあるフランス歌曲の作品のうち、もっとも演奏される機会が多いのではなかろうか。

「ある日の詩」は、1878年頃の作と推測されているが、CH・グランジャンの詩につけられたこの連作歌曲は、声楽家ポリヌ・ヴィアルドーの娘、マリアンヌとの婚約解消で傷ついた心を癒し、その痛手から立ち直る契機となった作品といわれ、全三曲を通して聴くと、あたかも恋を得てそして恋を失った、作曲者自身の心の変化が投影されているように感じられる。なお、この作品は男性歌手によって歌われることも多い。

原曲はバリトン、メゾ・ソプラノの音域で書かれているが、今回はソプラノ用に移調して歌われる。

第1曲 “めぐり逢い” 4/4 拍子

恋に巡り会って心慰められた詩人の喜びが、優しく歌われている。

第2曲 “いつまでも” 4/4 拍子

調性は短調となり、第1曲とは対照的に、恋を失った悲しみが、速いテンポで激しく歌われる（アレグロ コン フォーコ）。激しく揺れる動く気持を表すかのように、途中では遠い調にまで転調して行く。

第3曲 “さようなら” 4/4 拍子

調性は第2曲の同主調となり、テンポも落ち着く。（モデラート）

「ああ！このうえもなく長い愛の短かったことよ！ そして、あなたの魅惑から去りつつわたしは云う、涙なしに 私が愛を告白した時のように云う さようなら！」

詩人は諦め、「さよなら」と恋に別れを告げる。恋の痛手から立ち直った心を表すように、明るく、第2曲のような暗さはない。

※詩の訳は萩原英彦詩の訳詞から、部分的に引用した。

バッハ=ブゾーニ 「シャコンヌ」
J. S. Bach=F. Busoni [Chaconne]

フェルッチョ・ブゾーニ(1866-1924)は、イタリアに生まれ、ドイツで活躍した、ピアニスト・作曲家・指揮者兼音楽教育者である。彼はシェーンベルク、バルトークなどの新しい音楽の紹介にも尽力したが、新古典主義を唱え、過去の音楽との本質的なつながりを重要視にした。バッハの無伴奏ヴァイオリンのためのパルティータ第2番短調「シャコンヌ」を編曲したこの曲は、アメリカに演奏旅行していた1897年頃の作品といわれている。

演奏難度の高い技巧を散りばめロマン主義的に展開されるピアノ手法から、彼のヴィルトゥオーソ技術と敬愛していたリストからの影響を感じさせるものがある。しかし、自分の求めるままに、自由に原曲を処理しているようにみえながら、バスラインや和声機能など、バッハの音楽の骨格はしっかりと守られている。この作品は、華やかさと重厚さの両方の表情をもち、気鋭のピアニストにとって挑戦しがいのある作品となっている。

ベルリオーズ 歌曲集『夏の夜』 作品9より
H. Berlioz [Les nuits d'été] Op9 ~

フランスロマン派の奇才ルイ・エクトル・ベルリオーズ (1803-1869) は、自分のかなえられぬ恋を題材にした「幻想交響曲」の作者としてよく知られている、しかし、決して多くはないが、優れた歌曲作品を残している。高踏派の詩人ゴーティエの詩に曲をつけた全6曲からなる歌曲集「夏の夜」(1940)は、彼の歌曲作品の代表作であり、グノーの作品と共に、後のフランス歌曲隆盛の礎となった。なお、この作品は1843年~1856年にかけて作曲者自身により全曲が管弦楽伴奏用に編曲され、今日ではピアノ伴奏版と管弦楽伴奏版の両方が演奏される。

“ヴィラネル” (“Villanelle”)

曲集の最初の曲で、「ヴィラネル」とは田園詩のことである。「寒さが遠のいたら二人で森に鈴蘭を摘みに行こうよ」と恋人達が春を思って歌う2/4拍子の生き生きと浮きたつような曲想をもっている。ベルリオーズらしい意外性のある和声進行が、音楽に魅力的な彩りを与えている。

“入り江のほとり (哀歌)” (“Sur les lagunes (Lamento)”)

恋人を亡くし、一人残された漁師が歌う哀歌。二短調6/8「私の美しい恋人は死んでしまった」沈鬱に歌い始め、中間の部分では長調になり、静かに思い、終わりの方では激しい悲嘆の情がこみ上げてくる。感情の表現の起伏が大きい、ドラマチックな表現力をもった作品である。なお、フォーレも同じ詩に作曲している。

ショパン マズルカ 作品59 (F.Chopin Mazurka op. 59)

フレデリック・ショパン (1810-1849) は、ポーランドの民族舞踊形式である「マズルカ」のタイトルを持つ作品を50曲以上残している。1844-45年にかけて作品59の3曲マズカを作曲しているが、ジョルジュ・サンドの息子モーリスとの関係がもとで、彼女との間も冷えかかって来た頃でもあり、そういうこともあってか祖国への強い想いが感じられる作品となっている。

「マズルカ」 作品59-1 イ短調 3/4 モデラート

単旋律でもの悲しくはじまる。複合三部形式で書かれているが、半音下の嬰ト短調で最初の主題が再現する。しかし、半音階的な転調をともなう経過句を通して自然に原調に導かれて行く。悲しい想いを込めた音楽だが、円熟した作曲技法に支えられ、聴く者の内面

に訴えかけてくる。

「マズルカ」 作品59-2 変イ長調 3/4 アレグレット

メンデルスゾーンの要請を受けて書いたといわれるこの曲は、全曲とはことなり明るくやさしい曲調で書かれている。比較的単純な旋律主題が幾度も出現するが、後半では左手で旋律主題が出現し、終盤に出現する半音階的定型進行とともに、表現に変化と彩りをもたらしている。

「マズルカ」 作品59-3 嬰へ短調 3/4 ヴィヴァーチェ

シュパンが短調のマズルカでヴィヴァーチェの速度標語を使うことは極めて珍しい。この曲はそれほど速く演奏することはないが、曲想はヴィヴァーチェの言葉通り、悲憤を感じさせる激しい曲調ではじまる。中間部では明るい同主調の部分が現れるが、また、最初の激しい主題が再現する。最後の結尾は怒りの矛を収め、長調で曲を閉じる。

諸井三郎 「少年」 3/4 拍子 変ホ短調

1929年に三好達治の詩に作曲された。諸井三郎の歌曲作品は少ないが、この作品は比較的演奏される機会が多い。

16分音符の六連符の軽やかな分散和音にのって、透明感のある旋律が歌われる。途中、この時代の日本作品には比較的めずらしく頻繁に変拍が出現するが、歌詞のリズムが導いた変拍であり不自然さはない。淀みない少年の心を感じさせるすがすがしい作品である。

ヘンデル オペラ《エジプトのジュリオ・チェーザレ》より

“私に憐れみを感じてくださらないなら

G.F.Handel [Giulio Cesare in Egitto]～ “Se pietà di me non senti”

ゲオルク・フリードリヒ・ヘンデル(1685-1759)の三幕のオペラ《エジプトのジュリオ・チェーザレ (エジプトのジュリアス シーザー)》は1723年～1724年に作曲され1724年2月にロンドンで初演され大成功を収めた。

“私に憐れみを感じてくださらないなら”は、このオペラの第2幕、第8場で、クレオパトラが歌うアリア。シーザー殺害の陰謀が企てられていることを知ったエジプト女王クレオパトラはシーザーを逃がそうとするが、シーザーは逃げようとせず、反逆者達に立ち向かって行く。一人残されたクレオパトラは、シーザーを護り、我を哀れみ給え、と神に祈る。嬰へ短調 4/4 拍子でゆっくり歌われるアリアは、悲しみの中に高貴さを感じさせる美しい音楽である。原曲はA-B-Aで全く同じAの部分が再現するダカーポアリアとなっているが、今回は前奏と再現のAの部分を縮小して演奏する。

プーランク 「六重奏曲」 (F. Poulenc [Sextuor])

フランス6人組の一人、フランシス・プーランク(1899-1963)は、オペラ、管弦楽、室内楽、歌曲など様々なジャンルで多くの作品を残しているが、室内楽作品では木管楽器を用いた作品が多い。単純かつ軽妙で機知に富む彼の作風には絃楽器より、管楽器の音色の方

が合っていたのであろう。このピアノと木管五重奏のための六重奏曲は 1932 年に作曲され、1937 年に改訂されているが、彼の室内楽分野の代表作として、現代でもしばしば演奏される。この作品は、以下の 3 つの楽章により校正されている。

第 1 楽章 アレグロ・ヴィヴァーチェ

ごく短い序奏と、コーダを持つ、急－緩－急 の三部形式で作られている。

4/4 拍子で 5 小節の序奏が終わると、2/4 拍子となりピアノの 16 分音符にのって木管楽器のユニゾンで主題が出現する。中間部ではファゴットのソロに導かれピアノがソロで序奏の主題を奏でる。嬰ハの持続音に収束した後、小休止があり、フルートとオーボエのユニゾンで 5 度低く「急」の主題が再現する。fff のユニゾンで「急」が再現する部分が終わり、ホルンのソロで始まる 29 小節のコーダが続き、この楽章を閉じる。

第 2 楽章 ディヴェルティスマン (ディヴェルティメント)

この楽章は 緩－急－緩 の 3 部形式をとっている。まず、オーボエが変ニ長調で美しい旋律をやさしく奏でる。中間部では時価が半分になり快活な音楽となる。再現部では最初の旋律をオーボエに代わってクラリネットが変イ長調で奏でている。

第 3 楽章 フィナーレ (プレスティッシモ)

短い導入の後、8 分音符のリズミックな主題と、ゆったりした叙情的主題が交互に現れる。コーダに入ると、第 1 楽章の序奏の主題が回想されるように、PP で奏された後、急速に盛り上がり曲を閉じる。

フォーレ

「アルペジオ」作品 76-2 、 「ばら」作品 51-4

G. Fauré

“Arpège” Op. 76-2 “La rose” Op. 51-4

「アルペジオ」は 1897 年にアルベール・サマンの詩に作曲されている。この時代になるとドビュッシー、ラヴェルなどの創作期と重なっており、後期につながる円熟した作風がうかがえる。曲は右手に音階的旋律、左手で分散和音をともなうピアノの 2 小節の前奏で始まるが、旋律線は緩やかながらも、しばしば原調から遠く逸脱する和音の間を泳ぐように歌われる。そのような和声法が音楽に微妙な陰翳をもたらしている。歌の旋律は第 5 音を保続し、同主調で消えるように曲を閉じる。

「ばら」は 1890 年にルコント・ドゥ・リールの詩に作曲している。ピアノの付点リズムを伴った上昇する主題の呼び掛けに、下降する美しい旋律で歌が応える。ピアノの主題は旋法や蝶を変えて何度も登場する。その度に歌は美しい旋律で応える。それはあたかも詩人と薔薇の対話のように、続いて行く。

ドビュッシー 「現れ」(C. Debussy “Apparition”)

クロード・ドビュッシー(1862-1918)は、歌曲の分野でも優れた作品を多く残しているが、象徴派の詩人と親しく接し、彼等の詩に多く作曲している。また、マラルメの火曜会のメンバーであったことも知られている。

「現れ」は初期にあたる 882 年にステファン・マラルメの詩に作曲したもので、ドビュ

ッシーがマラルメの詩を手がけた最初の作品である。

ピアノ高音のさざ波のような音型を背景に“月は悲しみてありき”と呟くような同音反復で歌いはじめる。冒頭のホ長調から、変二長調、ハ長調と調が変わって行き、旋律の跳躍幅も大きくなる。音楽は次第に盛り上がり、“あらわれぬ”と歌うところで、この曲の最高音、3点ハ音が出現する。この曲では、いきなり高い音が登場するので、発声技術の面でも難しい。曲は最後は原調から離れ、変ト長調で終結する。

バッハ＝ブラームス 左手のためのシャコンヌ

J. S. Bach=J. Brahms Chaconne for left hand

ヨハネス・ブラームス（1833-1897）にはショパン、ウェーバー、バッハの沙作品を土台とした「5つの練習曲」というピアノ独奏曲があるが、この作品はその5番目に組み込まれている。

しかし個々の練習曲の作曲（編曲）年代はまちまちで、この曲の出版は1877となっている。なお、この曲を巡るブラームスとクララの経緯については、演奏者自身がメッセージで触れているので、そちらを参照願いたい。

ブラームスの編曲は、前述のブゾーニと対極をなすもので、ブゾーニの場合はバッハの音楽を土台にしながらも、自分が求める音楽表現をふんだんに盛り込んでいるが、ブラームスの場合は、バッハの書いた音符を殆どそのまま忠実に再現していることだ。ただ、ピアノはヴァイオリンと異なり音が減衰して行く楽器である。またヴァイオリンは音域の異なる4本の弦で、殆ど同時に重音を弾くことが可能だが、左手だけでは、同時に打鍵出来る音域は限られる。そのため、ある声部の音域をオクターブ上下させたり、アルペジオを効果的に使用することで原曲の四声部の動きを再現するなど、様々な工夫がなされている。

それでも、やはりバッハの原曲の方が良いという人がいるだろうが、高音楽器のヴァイオリンのために書かれた音楽を、音域が広く力強く打鍵出来るピアノに移したことで、バスラインはより明瞭になり、原曲の和声的構造がより明確に浮かび上がって来ているような気がする。それにしても、無伴奏のヴァイオリン一本で、これだけ複雑な多声部構造を持つ厳粛で広大な音楽を作曲したバッハは凄い。ブラームスはその作品の持つ厳粛な世界を、少しも損なうまいとして、誠実に編曲している。この作品の音楽的魅力を伝えるには、ピアニストの側に深い表現力が要求される。

オッフェンバック 歌劇《ホフマン物語》より “森の小鳥はあこがれを歌う”

J. Offenbach [Les Contes d' Hoffmann]～ “Les oiseaux dans la charmille”

ジャック・オッフェンバック（1819-1880）は、ドイツで生まれフランスで活躍した歌劇の作曲家で、喜歌劇「地獄のオルフェウス（日本名：天国と地獄）」

など、多くの喜歌劇を作曲し、オペレッタの祖などと謂われている。

そのオッフェンバックが、最後の力を振り絞って書いたのが歌劇「ホフマン物語」である。最後に娯楽対象の喜歌劇ではない、不朽名作を残したいという思いで作曲に挑戦したのであろうが、もう少して完成というところで、力尽きて永眠してしまう。その後ギローの手で完成されている。

原作はドイツのロマン派作家 E・T・ホフマンの小説「ホフマン物語」であるが、そこからいくつかのエピソードをとって戯曲化されたものを下敷きにしており、5つの場面からなるオムニバス形式の作品として創作されている。

“森の小鳥はあこがれを歌う”は、第一幕（プロローグを第一幕とする場合は第二幕）のゼンマイ仕掛けの機械人形「オランピア」の物語において、オランピアが歌うコロラトゥーラの aria。小鳥のようなフルートの前奏に導かれ、オランピアは変イ長調 6/8 拍子で可愛らしく歌い始める。同じ旋律が二度繰り返されるが、いずれも分散和音を歌い一点変口音に到達したところで、ゼンマイが切れ、歌い方が遅くなり半音ずつ音が下がって行く。人形の持ち主スペンザーは慌ててゼンマイを巻き戻す。

音域も広く高度なコロラトゥーラの技術を要する曲だが、愛くるしさと機械人形のぎこちなさを、ともに感じさせるように表現しなくてはならず、そういう面でも難しい aria である。

なお、この作品中、最も有名な二重唱曲〔舟歌〕は、この次の幕で歌われる。

リスト 「リゴレット（演奏会用パラフレーズ）（ヴェルディ）」

F.Liszt Rigoletto (Paraphrase de concert) S.434

19 世紀のピアノ音楽界の帝王ともいえるフランツ・リスト (1811-1886) は、多くのオペラ作品を題材としてピアノのためのファンタジーを作曲しているが、ここで演奏される「演奏会用パラフレーズ《リゴレット》」は、そういう作品の中の代表品である。この作品では、一般に良く知られたジルダの aria “麗しき御名” や、マントヴァ公爵が歌う“女心の歌”からではなく、第三幕で、マントヴァ公爵、マッダレーナ、ジルダ、リゴレットが歌う四重唱の後半部分から題材を得ている。調性は導入部ではホ長調となっているが、すぐに原曲の「四重唱」と同じ変ニ長調に落ち着き、《リゴレット》ではマントヴァ公爵が歌う旋律が登場し、これがこの曲全体を牽引する主旋律として扱われている。その周りを様々なピアノ技巧を駆使した音型が、アラベスクの装飾のように飾って行く。そのような音の処理にはピアノ音楽界の帝王リストの偉大なヴィルトゥオーソとしての能力が遺憾なく発揮されており、《リゴレット》の原曲を知らない者が聴いても、聴き飽きることがない。しかし、この作品を聴き手に魅力的に伝えるためには、独奏者にヴィルトゥオーソ的技量と表現力が要求される。

《読者のページ》～東北関東大震災について思う～

巨大地震と原発事故について思うこと

作曲家 ロクリアン正岡

まずは被災された方々へ、心からのお見舞いを申し上げます。

私は阪神淡路大震災の折には2回ほどボランティア活動の為足を運びましたが、今回は実際の活動においては年のせいもありとても役に立てる自信などなく、この悲劇をシンボライズする楽曲を物すことで、いずれは過去へと押し流されてゆく震災の記憶を呼び覚ます役目を果たせればと思います。

死者の数からすれば今回よりも多い関東大震災、近年の発展途上国における大地震などありますが、この原発事故さえ引き起こした天災は、人類の設置した自然的部分と人工的部分の境目に激しく楔を打ち込んだという点で、人類のこれまでの進み方にNOを突き付けられたような印象を受けます。

人間が地上に住み、早い話が人間自体が自然物でもある以上、今まで以上に原発を強固にし、人体改造も進め損傷した人体の修復医療も発展させよう、というのが最良の道でしょうか。「人間20歳になったら誰でも自然のままの臓器を永遠の命を約束する人工臓器に次々と取り替えて行きましょう。」なんて言い出す時代に来てはほしくありません。また、これを機会に原発を減らす方向に進んで行くのが良いのではないのでしょうか。

すべては、人類の頭の中でどんな意識、価値観が生じ主流を形成して人類自身を導いて行くかにかかっておりましょう。

そういうことを考える時、「芸術に於いてはそれが美しい限りあらゆる方向の表現が許されるべきだ」ということは認めつつも、私は「ただし、人類を幸福へと導く意識を啓発し増強する力を持つ芸術こそが主流とならねばならない。なぜなら芸術の美とは”魂の輝き”だから」と申し上げたい。

2011.03.25 {本会作曲会員}

「被災地のテレビを見ていて、電気はそんなにいらぬ、原発もいらぬ、という声が印象的でした。日本はまた放射能に脅かされている訳ですね。井伏鱒二の『黒い雨』を思い出します。」

安田謙一郎 (チェリスト 弦楽部会員)

神奈川県に住んでいます。日常の生活があつという間に消え去る恐怖を生まれて初めて知りました。被災された方々へ、心からお見舞い申し上げます。

北村真紀子 (ピアニスト 本会青年会員&Fresh Concert CMDJ2011 出演者)

助川敏弥様、皆様

今、全世界が日本のために心を痛み心配しています。

そして、今朝、D. バレンボイムとウィーン・フィルは、日本の犠牲者を悼む曲として、モーツァルトの緩徐楽章を心をこめて演奏した後、二分間黙祷を捧げてから、彼等のコンサートを始めました。私は、貴方の親類や友人が被害に遭わなかったこと、そして貴方自身が無事でいてくれることを望みます。日本の人々はとても勇敢です。そしてこのような大惨事に直面しながら、彼等が落ち着いて対応していることについて、ただ感嘆するばかりです。

ウィーン VMM 社長 ナンシー・ファン・デ・ヴェート

被災地、被災者の方々へ

日々メディアを通してではありますが被災地の状況を見守っています。

お亡くなりになったたくさんの方々、残された家族の方々のことを思うと涙があふれてとまりません。とても寒かったろうに、とても冷たかったらうに、とても恐ろしかったらうに、と思えば思うほど痛みが心をしめつけます。

命とは時間であり、そのことは震災前の営みの日々も被災された瞬間も同じです。

「命とは時間」であることが人が生きるうえでこんなにも心を上げ下げしてしまうことを今回の未曾有の大震災をうけて実感いたしました。

そして残された家族の方々は、強く、命の時間を先に進めていこうと懸命に生きてらっしゃる、その姿に私は心を救われました。

そして、日々が音楽のことでいっぱいであることは本当に幸せなことなのだとこのことを実感しています。今私にできることは募金させていただくことと祈ることしかありませんが、音楽が必要になってきたときに被災者の方々の心に届く音楽ができますように精進していきたいと思えます。

どうか今を、どうか今を生き抜いてください、私は微力ながら日々見守っています。応援しています。

今回の大震災でお亡くなりになられた皆様のご冥福をお祈りいたします。

そして被災者の方々、大切な家族を失い残された方々の一日も早い復旧と復興を心からお祈りいたします。

小西徹郎（本会作曲会員）

この度の震災で被災された皆様に、心からお見舞い申し上げます。一日も早い復旧・復興を願っております。

凄惨な今回の災害の中、現在も懸命の復旧作業が続く中、日本人同士や諸外国からの励ましや一人一人の善意の環がこれほど嬉しいと思ったことはありません。

今。ある人は直接現場で救助・復旧活動にあたるかもしれませんが。ある人は自分の体や言葉を通じて、生きる力を分け与えられるかもしれませんが。そして多くの人にとって、今の日々の仕事を通じて社会と人と物、そしてネットワークや流通を守り助けることが、遠くからの援助になるかと思います。募金、寄付、ボランティア、言葉。みんな、自分の出来ることや持っているものを、規模の大小や形を問わず、差し出そうとしています。

今こそ思います。私たち一人一人は微力ではありますが、無力ではありません。決して無力ではないのです。

私たち音楽家も、世が復旧から復興へ向かうとき、きっと心の役に立てる時が来ることと思います。それまで、ともに悲しみ、ともに苦しみながらともに耐え、世に寄り添いながら、みんなでその時を一緒に、少しでも優しい表情で迎えられることを希求しております。

橘川 琢（本会作曲会員）

この度の東北関東大震災で被災された皆様に心よりお見舞い申し上げます。

高知県の室戸岬の近くで生まれ育った私にとって津波の恐ろしさは小さい頃から伝え聞いておりましたがこの度の大津波は想像も付かない凄さで、あまりの惨状に胸がつぶれる想いです。多くの尊い命を奪い、町全体を根こそぎ奪っていったあまりの悲惨さに、言葉もありません。一日も早く復興されますよう心よりお祈り申し上げます。

このような時に私が地震当日体験した不思議な出会いについて書くこともためらわれますが、この惨状の中で人の情の温かさに触れました。

3月11日、合唱指揮の仕事で大塚にいました。発表が終わり遅い昼食を一人でとるため、大塚駅前のレストランの席に着いたとたん地震に遭遇しました。窓の外の街路樹が大きく揺れ、今までに感じたことの無い異様な横揺れ、長時間の揺れにこの地震がただ事でない恐怖をおぼえました。電車は全てストップ、いつ動くかも分からない中待機していました。

その内今晚中には動かないとの情報が入り、どのようにして我孫子市の自宅に戻ろうか困り果てました。その時レストランで同じく待機中の隣の席の方が馬橋、そしてそのお隣の方が北柏と偶然にも同じ常磐線沿線の方と分かりました。北柏の方のご主人が仕事で船橋まで車で来ているので連絡が取れば一緒に帰りましょう、と見ず知らずの私に親切に声をかけて下さいました。携帯電話は全く通じずやはり無理かと思った矢先、ご主人から電話がかかってきました。船橋から大塚まで約7時間、そして大塚から我孫子まで約5時間、大渋滞の中を同乗させて頂き朝5時に自宅に帰ることが出来ました。大変な一日でしたが見ず知らずの私に親切に声をかけて下さったことが本当に嬉しく、人の情けをしみじみと感じた一日でもありました。

浦 富美（本会声楽会員）



CMDJ 会と会員の情報

【お断り：東北関東大震災の影響により以下の公演などのスケジュールは変更される場合がございます。主催者にご確認の上のお出かけをお勧めさせていただきます。】

1. 会と会員のスケジュール

4 月

- 7日(木) 定例理事会【事務所 19:00】
- 8日(金) フレッシュコンサート CMDJ 2011【すみだトリフォニー小ホール 18:30】
- 10日(月) 親子で楽しむピアノデュオの世界 並木桂子 共演・岸洋子
リスト／ハンガリー狂詩曲第二番ほか
【ユーロピアノショールーム 15:00 無料】
- 16日(土) 深沢亮子 シューベルト作品
共演:中村静香【新宿住友ビル7F朝日カルチャーセンター 16:00】
- 29日(金・祝) 浦 富美・島筒英夫・渡辺裕子 あびこファミリーコンサート 21th
「新緑によせて～歌とピアノとヴァイオリンの調べ～」 曲目: さよならぼく
たちのほいくえん(ようちえん)、新緑の中で ほか (島筒英夫作曲)
【あびこ市民プラザ 13:30 1000円】
- 29日(金・祝) 斉藤寿美代 招聘ー エフゲニー・ザラフィアンツリサイタル
曲目: シューマン/フモレスケ、ラフマニノフ/ソナタ第2番 ほか
【神戸朝日ホール 13:30 5000円】

5 月

- 7日(土) 定例理事会【事務所 19:00】
- 8日(日) 深沢亮子ー仙台ピアノ工房5周年記念 深沢亮子ピアノコンサート
【仙台ピアノ工房 15:00】
- 11日(水) 作曲部会コンサート【すみだトリフォニー小ホール】(詳細未定)
- 14日(土) 亀井奈緒美、栗栖麻衣子 デュオコンサート
インファンテ/アンダルシア舞曲ほか【カワイ表参道ミュージックサロン
「パウゼ」 19:00 一般3000円/高校生以下2000円】
- 20・21日(金・土) 広瀬美紀子「ピアノとチェロによるデュオコンサート」
曲目: 助川敏弥/Prelude 春(初演) ほか 共演: 管野真衣(Vc.)
【スタジオムジカ(八王子)】
- 21日(土) やまのて音楽祭: 原口摩純 ガラ・コンサート「ピアノ&ゴスペル」
大人も子供も楽しめる音楽会 Part3 【名古屋市千種文化小劇場 13:30
一般2500円/中高生1000円/1歳~小学生500円】
- 22日(日) 山城祥二 芸能山城組春祭 ハイパーソニック・ライブ 2011
新しいアレンジでジェゴグのサウンドの魅力を最大限引き出した交響組曲

『AKIRA』の作品ほか【第一生命ホール 18:00 開演 前売:S席 4000円/A席 3000円 当日:S席 5000円/A席 4000円】

26・27日(木・金) 深沢亮子 CD収録 中村静香さんと シューベルト作品

28日(土) 並木桂子ーピアノデュオブリランテ第9回公演～フランスとロシア～
曲：チャイコフスキー/バレエ音楽・眠れる森の美女 ほか
【オペラシティリサイタルホール 19:00 全自由席 3,500円】

29日(日) 橘川琢(作曲) 詩と音楽を歌い奏でる「トロッタの会」第13回
曲：組曲「都市の肖像」第四集《首都彷徨/硝子(ガラス)の祈り ～詩唱・ソプラノ・ヴァイオリン・ヴィオラ・ピアノ・花による》op.51 ほか
【早稲田奉仕園スコットホール 18:30 開演 3,000円】

6 月

7日(火) 定例理事会【事務所 19:00】

11日(土) 芝田貞子・嶋田美佐子・高橋順子「平和のためのコンサート」
創作講談「ヒロシマ・ナガサキ・アンド・ピース」・一本の鉛筆 ほか
【牛込笹塚区民ホール 14:00 2200円】

21日(火) ベートーヴェン ヴァイオリンソナタ レクチャー
Vn. ソナタ第7番 講師：北川暁子・北川靖子 ピアノ奏者：亀井奈緒美
【18:00～ 北川靖子宅】お問い合わせ・お申し込みは戸引まで

7 月

5日(火) 声楽部会コンサート【すみだトリフォニー小ホール】(詳細未定)

7日(木) 定例理事会【事務所 19:00】

9日(土) サロンコンサート 並木桂子&田中俊子ほか
曲：ベートーヴェン/運命(四手連弾) ほか
【原宿アコスタジオ 14:30 2,500円】

15日(金) ピアノ部会コンサート【杉並公会堂小ホール】(詳細未定)

16日(土) 「笠原たか ソプラノリサイタル」
曲：ブラームス「永遠の愛」、シューマン「女の愛と生涯」ほか
【サントリーホール ブルーローズ 14:30 開演 5,000円】

31日(日) 戸引小夜子「ソロと2台ピアノの夕べ」 共演・安達朋博
曲目：リスト・ドビュッシー・ミヨー ほか
【大成コンサート・スタジオ 17:00 軽食つき 5000円】

9 月

15日(木) オペラコンサート 2011【すみだトリフォニー小ホール】(詳細未定)

10月

4日(火) 20世紀以降の音楽とその潮流～様々な音の風景Ⅷ～
【すみだトリフォニー小ホール】

11月

10日(木) 深沢亮子 Duo リサイタル 中村静香さんと(Vn)【東京文化会館 19:00】

- 11 日(金) 並木桂子ー作曲家シリーズV ドヴォルジャーク 曲：ピアノトリオ
「ドゥムキー」ほか【ティアラこうとう小ホール 19:00】
12 日(土) 若い翼によるCMDJ コンサート4【すみだトリフォニー小ホール】
出演者募集中（戸引）

12 月

- 6 日(火) ピアノと室内楽の夕べ 日本音楽舞踊会議主催【音楽の友ホール 19:00】
深沢亮子(Pf.)、恵藤久美子(Vn.)、安田謙一郎(Vc.)、藤井洋子(Cl.)
曲目：モーツァルト/トリオ K. 498、K. 502、シューマン/クラリネットとピアノ
のためのロマンス、助川敏弥/ 松雪草(新作 初演予定)
10 日(土) 麦の会チャリティーコンサート【津田ホール 14:30】

2012 年

1 月

- 22 日(日) 「2012 年新春に歌う」(仮称)【すみだトリフォニー小ホール】
(詳細未定・昼間公演)

3 月

- 12 日(月) CMDJ 出版楽譜によるコンサート(仮称)高橋雅光プロデュース
「詳細未定」【すみだトリフォニー小ホール】
24 日(土) 日本音楽舞踊会議主催「コンチェルトの夕べ」(仮称)
【ヤマハ・エレクトーンシティ渋谷 16:00 開演】出演者募集中（戸引）

会員・賛助会員の皆様へお知らせとお願い

- この「会と会員のスケジュール」欄は本会関係者に無料開放されています。皆さまのスケジュールをお寄せ下さい。毎回のエコー及び月刊「音楽の世界」誌上に掲載されます。原稿は以下の要領でお書き下さい。
- 演奏会に限らず、出版、講演等も「音楽の世界・会と会員のスケジュール欄掲載希望」として日本音楽舞踊会議事務所までメールまたは Fax でお知らせ下さい。
- お知らせいただく際は、①〇月〇日(曜日) ②会員名(催し物が会員名で始まる場合は不要) ③催し物(出版物名) ④メインプログラム一曲、もしくはメイン公演・講演内容を一つ ⑤【開催場所、開演時間、チケット価格、等】の順番でお書きください。
- このスケジュール記載の本会主催事業(ゴシック文字)には、会員・賛助会員・CMDJ 友の会の方は会員証呈示で無料、または会員割引料金でご入場頂けます。

編集後記

先月号のこの覧でニュージーランド地震に触れましたが、3月11日には、東北・関東地方が未曾有の大震災に襲われ、大きな被害を出しました。震災でお亡くなりになった方々のご冥福をお祈りし、被災された方々にお見舞いを申し上げます。このような大災害は、今生きている我々にとっては生まれて初めての経験ですが、ご自身も被災し、ご家族の安否も判らないままなのに、他の被災者のため一生懸命働いている役場の職員の方々の姿などをテレビで見て、胸が熱くなりました。このような人々の姿を見て、いまは大変だけれど、日本はかならず震災の痛手から立ち直り、復興すると確信いたしました。

我々の雑誌は小さな雑誌ですが、今月号にはコンサートの記事だけでなく、僅かなスペースではありますが、大震災に対する一人一人の思いを、掲載することにいたしました。我々も勇気をもって前に進んで行こうと思っています。

(編集長：中島洋一)

本誌は次のところでお取り次ぎしています

北海道	ヤマハ・ミュージック札幌店	011-512-1726
福島	福島大学生協	024-548-0091
千葉	紀伊国屋書店千葉営業所	043-296-0188
東京	オリオン書房外商部	042-529-2311
	(株)紀伊国屋書店 和雑誌アクセスセンター	03-3354-0131
	アカデミア・ミュージック(株)	03-3813-6751
	全国学生生協連合会図書サービス	03-3382-3891
	早稲田大学生協ブックセンター	03-3202-3236
神奈川	昭和音楽大学購買店	046-245-8100
静岡	吉見書店	054-252-0157
愛知	正文館書店外商部	052-931-9321
	マコト書店	052-501-0063
大阪	(株)ヤマミュージック大阪心斎橋店	06-211-8331
	ユーゴー書店	06-623-2341
兵庫	(株)ジュンク堂書店 外商部	078-262-7794
京都	龍谷大学生協書籍部	075-642-0103
沖縄	沖縄教販(株)	098-868-4170

編集長：中島洋一 副編集長：橘川 琢

編集スタッフ：新井知子 浦 富美 大久保靖子 栗栖麻衣子 高島和義 高橋 通 高橋雅光
戸引小夜子 北條直彦 湯浅玲子

音楽の世界 4月号(通巻 528号)

2011年4月1日発行 定価 500円(本体 476円)

発行人：芙二 三枝子

編集・発行所 日本音楽舞踊会議 The CONFERENCE of MUSIC and DANCE JAPAN

〒169-0075 東京都新宿区高田馬場4-1-6 寿美ビル 305 Tel/Fax:(03)3369 7496

HP: <http://www5c.biglobe.ne.jp/~onbukai/> E-mail: onbukai@mua.biglobe.ne.jp

A/D: 音楽の世界編集部 Tel: (03)3369 7496 印刷: イゲタ印刷(株) Tel: (04)7185 0471

購読料 年間: 5000円 (6ヶ月: 2500円) 振替 00110-4-65140 (日本音楽舞踊会議)

* 乱丁、落丁がございましたらお取替えます